

始



10.1.16



文學博士三矢重松著

增訂改版

高等日本文法

東京 明治書院

大正
15.12.2
内交

緒言

本書題して高等日本文法といふは、中等教育の程度より一步を進めたればなり。敢へて最高等の大文法に擬するにあらず。中等教育を経たる者は本書に由りて我が文法を更に的確に學習し得べし。

本書もはら文法の實質を説く中には理論に亘れるものあるは、説明の法やむを得ざるに出づ。古語及今の口語を併せ説けるは、國語の眞を發揮せむには一時代の語をのみ對象とすること能はざればなり。本書獨習用たり得べく、又教科用たり得べし。ざるは兩者を兼ねて一方にのみは極めて適當せず。随つて所説或は繁簡中を得ず、體裁また同じからざるものあるは、竊に遺憾とする所なり。

國語文法書の大成せる者、まづ大槻氏の廣日本文典及別記を推さるべからず。予が研究大抵先人の力に由れる中にも、大槻氏に負ふ所

最多し。かくて本書は舊説を統合補正したる者なれども、新説も亦おのづから無きにあらず。

諸成音 格 法 性相 敬語 助動詞 助辭
補足語 敘述句 省略 記録對話

等に關する者是なり。中に就きて並立格及前提法の名は清水平一郎氏の創意にして、前提法に順逆の兩態を立て、直説命令の二法と對せしめたるは、予が案なり。敬語の御二様の別は松下大三郎氏の所説に係り、助辭ガの意義、記録對話の諸説は、恩師物集先生の教を受けたることに頗多し。茲に特に並べ書して感謝の意を表す。

改版につきて

高等日本文法は、三矢博士の力作なり。而して是れが編著の要旨は、其の緒言中にも見ゆるが如く、主として高等學校程度の教科書、若くは参考書たらしめんとするにありしものなれども、亦博士が國語學上に下されたる一定石として、學界を裨益すること尠少なざりき。然れども出版後年數を経たるを以て、一度之を改訂せられんの意ありしが如く、其の手澤本は實に章編三絶の概あり。試みに其の内容を檢せんか、毛筆又はペンにて、いづれの頁にも殆ど余白なきまでに記入しあるのみか、或は大小の附箋、又は挿入紙を用ひて、説明又は例證の補入せられたるを見る。是れ即ち博士が實地授業又は讀書の際、その必要と認むるものを書き入れ置かれしものに係れり。

大正十二年五月下旬、國學院大學が飯田町より澁谷に移轉せんとする際なりき。博士は偶同所に於ける最後の授業を了へ、此の本を置き忘れて歸宅せられしが、是れも亦、同學所藏の圖書雜品と共に梱包して運送せられし爲、暫く其の所在を失し、折しも病中の博士をして、いたく憂慮せしめき。而も幸にして當時の圖書係伊川讓

君の好意に依り、諸方を搜索して漸く之を得、博士の病床に致し、かば博士も始めて安堵の色を顯はされたり。かくて其の年の七月、博士は長逝せられ、同九月の大震災は、本書の發行所明治書院を襲ひて、書冊の殘部と其の紙型とを併せて、悉く之を奪ひ去れり。是れ本書と、其の著者との運命なり。

越えて一年、明治書院が本書を復興せんとするに當り、余等の同窓にして同所の取締役たる森下松衛君は、著者に對する好意上、此の手澤本より内容の増補を計らん事を提言せり。是に於て余は之を博士の令弟三矢宮松君に報じ、且是れが補修者として榊原朝雄君を推薦し、余も亦應分の力を效さん事を約せり。余はもと榊原君と一面の識なしと雖も、君は博士が同郷の後進にして、又直接博士の教授指導を受けしもの、又曾て『文法教本』の三訂に際しては、特に君を煩し、如き關係もありて、博士が愛弟の一人たるを知ればなり。

かくて君が一度三矢家の囑を受くるや、喜びて之を受諾し、公務の余暇、孜孜としてさしも困難なる此の事業に没頭し、一々手澤本に就きて其の補入材料を整理し、殆ど其の全部を適當なる位置に按排せり。其の凡例は、大要左の如し。

一、改訂増補は手澤本の記入或は附箋に依るその大部分は用例を蒐集し説明せ

られたる者なれど、所説の訂正、分類項目及内容の増減などなきにあらず。

二、手澤本の行間に欄外に左右の餘白に附箋に記入せられたる語句、歌文など、成るべく適當なる個所に配置挿入せむとしたれども、又その項の末に纏め置きたるもあり。

三、傍注に？を附し、或は……カ……カ……カなどと竝書せられたるをば大體そのまゝに存したり。決定を與へられざる憾なきにあらざれども、亦讀者考察の一助ともなるべければなり。

四、項目のみありて説明なきあり、或は項目と例とのみありて説明なきあり、體裁上いかかと思はるれど、これ亦その儘に存したり。

五、句讀點、濁點などは少しく増し、んむらんむなど混用せられたれば、むらむらなどに、略一定したり。引用書名の(後)金なども(後)撰(金葉)などと改めたる所多し。その他の用語の朱記なきものは敢へて改めず。助動詞は常に助動辭とのみいはれたれど、舊來の儘になし置きたり。

六、本文中に『國學院雜誌第何號參照』などありたるを、『附録參照』としたり。

七、増補の結果、本文に於て約百五十頁、附録約百三十頁を増すに至れり。

「作歌と助辭」は曾て單行本として出版せられしものなれども、久しく絶版に爲りしを、偶博士の病中再版成りて之を其の枕頭に致し、かば、博士はいたく悦ばれしも、未だ發賣するに至らずして、其の全部を烏有に歸せしめきとされば之を附録とする事も、亦著者の意志を尊重する明治書院の進みて提言せし所なり。

猶又、論文數篇は博士が曾て「國學院雜誌」上に發表せられしものにして、本書と參照して便益多かるべきを思ひ、榊原君の注意に由りて併せて之を附録としたり、但し其の中の「國語に特有な文の三體」は「崇敬體」のみを説いて、未だ「記録體」、「對話體」に及ばれざりしのみなり。

斯の如くにして、本書は期せずして、實に斯の如き大冊を爲したり。是れ果して博士の意志なりや否や、之を知るべからずと雖も、博士がさしも愛惜せられし手澤本の、空しく埋没せんを悲みしと、且は其の著書と論文との一部を長く世に行はんとせし後人の情とは博士と雖も之を甘受せざるを得ざるべく、殊に博士が國語學に關する一大論文を草せんを志を抱いて、空しく幽冥に歸せられたる今日、本書の出づる事は、博士に取りても亦幾分の新意義なきに非ざるべし。余は博士が同學の後進にして、而も親善なる友誼を辱うせしもの、今しも本書の校正を終り、近く其の發

行を見んとするに方り、感喜の情に堪へず、即ち一言を述べて其の由來を明にし、且關係諸君に對し、謹みて深厚なる謝意を表す。

大正十五年十月

鳥野幸次

高等日本文法目次

總論

- 一 文法の性質……………一
- 二 文法の目的……………一
正しく文を作る爲に——解釋訓話の爲に——正しき國語を知らむが爲に——
——文法を知らむが爲に
- 三 文法の種類……………四
- 四 文法の三部……………四

第一篇 音字

- 第一章 音字……………六
- 一 言語と聲音……………六
- 二 文字の種類……………六

三 諸聲音

成音——母韻——子音——平短音——撥音——促音——長音——諸音と文字

七

四 音の變化

轉呼——二短音が一長音となる——連聲——撥促音の下のハ行——キクの促音——音便——其の他の例

一、二、三、八

五 假名遣

一八

第二章 漢字音

一九

一 成立分類及體……附漢字の漸増

一九

二 字音即音

二〇

三 韻の假字

二一

四 音韻

二三

五 字音の種類

二四

漢吳音の比較 十五種

六 字音假字遣 三十一種

二七

第二篇 詞 辭

第三章 言語の分類

三二

一 分類の標準

三二

二 詞辭

三四

三 接頭尾語

三六

第四章 名詞 代名詞

三七

一 名詞の種類

三七

二 代名詞の種類 稱 成立

四〇

三 數及敬語

四四

四 格

四七

1 主格

四八

2 領格——指示代名詞

五一

3 副格

五五

第五章 動詞

4 處置格 六二

5 呼格 六三

6 同格 六五

7 並立格 七〇

一 形態 七六

 根尾の有無——語尾變化の種類

二 活用と行——活用行の轉 七八

三 變格と語 八二

四 活用圖 八三

五 法 八五

 1 直說法——終止法——連體法——誤例——連用法 八七

 2 命令法 九八

 3 前提法——假定確定不定——順態逆態——口語——準前提法——連用法との關係——順態と逆態との關係 一〇二

第六章 形容詞

六 特殊動詞 一一五

七 他詞に轉ず 一一六

 名詞に——形容詞に——副詞——接續詞に

八 轉成動詞 一一八

 名詞より——代名詞より——形容詞より——聲貌より——副詞より——詞の疊語

一 種類 形態 一二二

 ク活——シク活——ナリ活——タリ活——カリ活——活用圖

二 法 一二六

 直說法——命令法——前提法——順態——逆態

三 諸用法 一三四

 名詞になること——熟語となる時——感嘆的言方——疊語——一語兩活——不完全活用——副詞をつくるく——特殊の語として——名詞より「ナリ活」に轉ずる者

四 形容詞を造る接尾語 一四七

く・し・き——しく・し・しき——けし——たし——らし——なし——がまし
 はゆし——勝なり——ほい——こい——どい——だらけ——が
 はし——かし——かまし——通しなり——らなり——たらしい——や
 かなり——はか——まし——はし

第七章 動詞の性相

第一節 自他性

- 一 自他……………一五九
- 二 自他の特例……………一六〇
 - 一 語兩性——一性兩語——熟語の時——自動に對するを
- 三 自他と活用……………一六九
 - 同根同行——同根異行——異根異行

第二節 被役相

- 一 形式……………一七一
- 二 非情の受身……………一七三
- 三 自動詞の受身……………一七五

四 受與……………一七六

第三節 可能相……………一七七

- 一 形式……………一七七
- 二 自然的可能相……………一七九
- 三 口語の一種……………一八〇
- 四 ヤ行下二段活の被能……………一八二
- 五 生得被能動詞……………一八二
 - 普通の形態——ヤ行下二段活の四語——ラ行四段活
- 六 被能を表す他の形式……………一八六

第四節 使役相……………一八七

- 一 形式……………一八七
- 二 他動との關係……………一九〇
 - 上一段活の三語——使役的他動——他動的使役——形容詞及指定助動詞の使役
- 三 可能相と被役相との關係……………一九六

第五節 被・能・使の重用……………一九九

- 一 被役と使役……………一九九
- 二 可能と使役……………二〇〇
- 三 其の他の重用……………二〇一

第六節 敬相

- 一 二種の形式 被役形——使役形……………二〇二
- 二 古格 使役形——サ行四段……………二〇四
- 三 生得の敬相……………二〇六
- 四 補助敬動詞 敬動詞——あり・なる・な・す・めす……………二〇七
- 五 口語 被役形・使役形——轉成補助動詞……………二一二

第七節 敬語

- 一 尊他……………二一七
- 二 自卑……………二一九
- 三 關係敬語……………二二〇
- 四 對話敬語……………二二二
- 五 (附)卑罵……………二二八

第八章 助動詞……………二二九

第一節 指定……………二三〇

- 一 なり……………二三〇
- 二 だ(口語)……………二三四
- 三 たり……………二三八

第二節 打消……………二四一

- 一 す……………二四一
- 二 ざる……………二四二
- 三 な……………二四三
- 四 なく……………二四五
- 五 じ……………二四六
- 六 めない(口語)……………二四八

第三節 想像(推量)……………二四九

- 一 むも……………二四九
- 二 うよう(口語)……………二五二

三 べし べみ……………二五四

四 まじ 口語(まい)……………二五九

五 まし……………二六三

六 めり……………二七二

七 らむ……………二七四

八 らし……………二七七

九 けむ……………二八二

第四節 希 望(希求・願望)……………二八四

一 たし……………二八五

二 なむ……………二八六

三 まほし……………二九〇

四 想像辭 む まし べし……………二九一

五 (附説) 感嘆のテニヲハ……………二九三

第五節 時……………二九六

一 一定時と不定時……………二九七

二 一定時の三種……………二九八

現在——過去きけり——未來

三 完了態……………三〇九

つぬ——たり——り

四 存在・繼續(進行)態……………三二〇

たり・り——あり・をり——第二變化と「あり」——居り・侍り・けり——略態

五 完了態と定不定時……………三三一

不定時——現在——過去——未來——將然態——兩態結合

六 形容詞及指定助動詞の時……………三五〇

きけり——つ——む・べし

七 口語……………三五六

た——である・てゐる——う・よう

八 雜説……………三六三

標準——想像と時——前提法と時

九 練習……………三七三

正例——誤例——正誤混交例

第六節 助動詞相互の接續……………三八四

一 敬語と相……………三八五

第九章 副詞

本則——特例一——特例二——特例三	
二 希望完了・否定想像過去——候ふ待りと他の助動詞	三八九
三 指定	四〇〇
四 助動詞連結表(文語及口語) 附三個以上の結合表	四〇四
一 釋義	四〇四
二 形態 種類	四〇六
體言副詞——用言副詞——程度——狀貌——情意——數量——時	
處場合——原因	
三 成立	四一四
甲 本來	四一四
純國語——字音——聲貌——疊語	
乙 轉成	四一七
形容詞より——動詞より——くの說——名詞より——代名詞より——	
熟語	

丙 接尾語	四二二
づゝ——ながら——すがら——がてら——から——づから——がね——	
——ごとに——ばかり——がり——ため——むた——なべに——など	
——まゝ——名詞より轉ずる者	
四 諸用法	四三四
位置——連體語に轉ず——名詞に轉ず——連體語をうく——補足的——	
——連體形の誤用——名詞と熟す——特性副詞の呼應	

第十章 接續詞

四四二

第十一章 感動詞

四四六

一 釋義	四四六
二 他詞との關係	四四八
名詞と——代名詞と——物の聲——副詞と——形容詞と——接續詞と	

第十二章 てにをは

四五二

第一節 單用辭

第一 名詞に附く者

- 一 一が……………四五四
- 二 領格——領格——同格——用言第四變化に——口語……………四五七
- 三 領格——なるに代る——同格——並立格——體言に代る——主格——處置格の一種——とに通ふ——體言のがの表……………四六五
- 四 つ(古語)……………四六六
- 五 副格——敬主に轉用——並立格——副詞を成す——前提法——にを略す……………四六八
- 六 處置格——副格——前提法……………四六九
- 七 主格を説明する同格名詞——場所場合——所由——原由——副詞に添ふ——獨立して接續詞となる——名詞を動詞に化す……………四七三
- 八 と……………四七四
- 九 一致する名詞——動詞を含みて副詞の句・小句を作る——與同對比——副詞を成す——(口語)準順態前提法——獨立詞に變ず……………四七九
- 十 九より から……………四八三
- 十一 副格——原由副詞——副詞に轉ず——副詞にも添ふ——(口語)準逆態前提法——(口語)主格の如くなる者……………四八五
- 十二 まで……………四八七
- 十三 副格——副詞にも添ふ——程度・併加・單一を表す——ばかり・丈の意を表す……………四八八
- 十四 順態前提法——口語——ければ……………四八五
- 十五 十一ば……………四八七
- 十六 十二ど ども (口語)けれども……………四八七
- 十七 十三と とも (口語)とともに……………四八七
- 十八 十四て——口語……………四八九
- 十九 十五つ……………四九〇
- 二十 十六し(口語)……………四九二

第三 諸詞に附く者

- 一 諸詞に附く者……………四九二

(い) 感嘆に基づく者

- 十七 は 四九二
主格・處置格——古文副格——連用法・副詞・接續詞に——文を結ぶ
- 十八 も 四九六
主格・處置格——連用法・副詞・接續詞に——逆態前提法——順態にも——終止語に
- 十九 ぞ 四九八
主格・處置格——連用語——文を結ぶ——ぞ(口語)
- 二十 し (口語)文を結ぶ——中止 五〇〇
- 二十一 なむ(なも) 五〇一
- 二十二 こそ 五〇二
主格・處置格・副格にも——連用語に——(古語)呼格——(古語)希望
- 二十三・四 や か 五〇七
疑問——係——係とならざる者——文を結ぶ——感嘆——命令法・終止法に——連體語に——副詞句を作る——名詞に——獨立格に——副詞・感動詞——希望のヤ——疑問とヤカ——區別——特例(ヤの)
- 二十五 よ 五二二

- 呼格に——文を起し、結ぶ——命令法に——稱に終止に——(口語)ろ
- 二十六 な 五二五
形容詞・助動詞に——動詞に——ムに通ふ——否定に——(口語)終止動詞に——諸詞に
- 二十七 かな かも 五二八
感嘆——疑問——文を起す——希望
- 二十八 ね 五三二
- 二十九 の 五三三
- 三十 が かも がな 五三四
- 三十一 かし 五三六
- 三十二 さ(口語) 五三八
- 三十三 を わ(古語) 五三八
- 三十四 い(古語) 五四〇
- 三十五 ゑ(古語) 五四一
- 三十六 やし(古語) 五四一
- 三十七・三十八 のみ ばかり 五四二

第二節

三十九、四十、四十一 だに すら さへ……………五四六

復用辭……………

てにをは結合一覽……………五四九

一 がに がは……………五五〇

二 のが のの……………五五二

三 にを にし にと により にまで……………五五三

四 をまで をば をし をや……………五五三

五 とが との とに とを とより とまで とし とは と……………五五四

も とや とな とよ とて……………五五五

六 からが よりか よりかも……………五五八

七 ばの ばや ばよ……………五五八

八 てし てを てな てや……………五五九

九 はも はぞ はし ばし はや……………五六〇

十 ちぞ もこそ もな もよや もなむ……………五六一

十一 ぞの ぞは ぞも ぞや ぞよ ぞな……………五六二

十二 しが しの しに しは しも しこそ しか……………五六三

十三 やの やは やも やぞ やな やし かなやな かなや……………五六四

十四 かは かや かよ……………五六六

十五 よや よな よし よかし (古語よの)……………五六六

第三篇 文章

第十三章 文……………五七〇

一 文……………五七〇

二 文の分解 二部——四部……………五七一

三 文と詞辭……………五七一

第十四章 四部の成分……………五七二

第一節 語……………五七二

一 主語……………五七二

二 敘述語 五七二

三 客語 五七四

四 修飾語 枕詞 五七五

五 四部以外の語 五七七

獨立語——接續語——補足語の説

第二節 句 五八一

一 中止句 五八一

二 修飾句 五八二

形容句——名詞句——獨立句——副詞句——挿入的副詞句——文の形なる句——前提法にて結べる句——前提法を強ひて變じたる句

三 敘述句 五八八

敘述句——總主説——文主を句主の修飾と見る——句主を客と見る——文主を客と見る——文主を敘述語の修飾と見る——句主を修飾と見る——敘述句の疊用——敘述句の變化

第三節 小句 五九九

一 形容小句 六〇〇

二 中止小句 六〇二

三 副詞小句 六〇二

四 敘述小句 六〇八

引用 六〇九

引用——挿入——符號——變化——句との關係

第十五章 成分の用法 六一三

第一節 成分の並置 六一三

一 主部 六一三

二 敘述部 六一四

三 客部 六一六

四 修飾部 六一七

五 獨立部 六二〇

第二節 成分の位置 六二一

一 正置 六二一

二 倒置 六二三

第三節 成分の省略

敘述部を始に——客部を始に——修飾部を始に——主・客・修・獨を終に
——客修と敘との關係——不尋當なる倒置——修辭上の倒置

- 一 主の省略……………六三〇
- 二 敘述の省略……………六三四
- 三 主と敘述との省略……………六三七
- 四 客の省略……………六三九
- 五 修飾の省略……………六四一
- 六 修飾の下なる種々の省略——修辭上の省略——修辭の變略……………六四四

第四節 係 結

- 一 成分の係屬……………六五三
- 二 係結の意義……………六五四
 - 係結——結ばざる敘述語——結べる前提法——二つの結——二つの係——連體法にて結ぶ
- 三 係結の變……………六五九
 - 疑問及ヤの係——コソの結——係屬の變——諸例

第十六章 文の種類

第一節 組織上の種類

- 一 單文……………六六八
- 二 複文……………六七〇
- 三 重文……………六七一
- 四 混交文……………六七二

第二節 性質上の種類

- 一 平敘文……………六七四
- 二 疑問文……………六七五
- 三 命令文……………六七八
- 四 感嘆文 感嘆文の形式……………六七九
- 五 意義上の相關……………六八三

第三節 待遇上の種類

- 一 平説文……………六八七
- 二 崇敬文……………六八七

三 卑罵文……………六八八

第四節 語氣の種類……………六八九

一 對話體と記録體……………六九〇

兩體と崇敬文——對話體の崇敬文——兩體と四種の文——提示文の
特徴——兩體と詞辭——兩體の錯綜……………七〇〇

二 自記と記他……………七〇〇

特殊の詞辭……………七〇〇

附 録

作歌と助辭……………七〇七

助動詞「らむ」の意義……………七七五

「らむ」について又……………七八四

「ことし」の論……………七八八

日本語の動作と状態……………七九九

國語に特有な文の三體……………八一六

(目次終)

高等日本文法

文學博士 三 矢 重 松 著



總 論

一 文法の性質

文法は文の法則を知る學科なり。文とはアヤの義にあらず。又一篇一章の文といふ意味にもあらず。一箇の兒結せる思想を表せる結付をいふ學問上の術語にして、英語の Sentence に當るなり。さて我が國の文法は、文語と口語とあり。其の法則は何れも文法なり。文の法則は歸納的に研究し、之を演繹的に應用すべきものなるが、今は専ら我が歸納的に研究したる結果を説くに止むべし。

二 文法の目的

(1) 正しく文を作る爲に

元來作文は構成的のもの、文法は解剖的のものなれば、全然其の趣を異にす。前者は作者の地位に

ありて之を實行し、後者は批評家の位置よりして之を研究するものなり。故に文法を能くする者必しも作文に巧なりといふべからず、又特に文法を學ばざる者、文を作る事能はざるにあらず。但言文一致せざる今日に於いては、正しき文を作らんが爲には特に文法を學ぶべき必要あり。上世言文一致の世にありては口語即文語にして、文を作るに特に其の法則を學ぶ要は無かりしなり。平安朝の末漸く言文相分れ、詠歌の如きは一種の技術の如く師傳を以て授受する如き勢を成すに至れり。即ち言語は時と共に推移すれども、文章にあらはすに至りては依然古の法則に従ひ、其の標準を延喜天曆の頃に取ることとなれり。これ言文兩途に分れし初なり。かく言文は時代を経るに従ひ益々其の差を生じ、鎌倉時代に至りては、詠歌に作文に自其の法則を學ぶこと必要となり。所謂定家假字遣の如きも此の時代に成りしなり。此の定家假字遣は古格に比ぶれば用法已に亂れ、同時代の西行寂蓮等の筆跡にも一般に假字の誤を見るなり。足利時代に至り、應仁の亂後は大に變遷を來し、戰國を経て徳川時代に及び、全然言文不一致の世となり了れり。かくて文學復興の事あるまでは當時の學者にして「花こそ咲け」「花ぞ咲く」等の係結の區別をだに知らざるもの多かりき。引きつゞき現時に於いても猶依然言文兩途に分るゝ上に、日常我等の正しく文を作る爲には是非とも文法を學ばざるべからざるなり。

(2) 解釋訓話の爲に

文章を解釋するに當りて、文法を知らざれば往々誤れる解釋を下すことあり。例へば「三笠の山に

出でし月かも、出テキル月と思ひ、名にめで、をれるばかりぞを居レルと解し、入らつしやるを居らつしやる、御出でを御居で、ござんなれを御坐んなれ、御坐るをござんなれの訛なども強ひ、古訓古事記は所御佩をミハカセルと訓じ、世俗又はねなましものをををねなまじと濁り、催馬樂のなりやしなましを橘守部の入綾には平氣にしぬらしに作り、新古今集には雪はふりけるをふりつゝ、衣ほしたりをほすてふに作れるなど、皆正しく語を解せざるよりの事なり。此の如き誤譯は實に枚擧に遑あらず。文法に通ぜざれば到底的確なる解釋は下すべからず。予は此の點において深く世人の反省を促さむとするものなり。

(3) 正しき國語を知らむが爲に

正しき國語を知らんには標準語を知らざるべからず。文法は標準語より歸納的に研究して得たるものなれば、正しき國語は又文法によりて知るを得べし。吾人が日常用うる言語極めて多き中に不正の語亦多し。是等は後來標準語を立つる上に於いて、文法によりて取捨せざるべからず。正格の語といへどもその用、一地方に局する者は標準語と立つること能はざる物あるを忘るべからず。例へば口語の「何々でござります」と「何々でおます」の如き、ござりますは廣く一般に用ゐられ、「おます」は或一地方に限り用ゐらるゝ語なれども、文法の上より是を論ずれば「ござります」は御坐り坐まにて重語なれば正しからず、「おます」は御坐まにて古くおましますなど、神皇正統記にも見えて正格なり。然れども今「ござります」を廢して「おます」を用うることは能はざるが如し。

(4) 文法を知らむが爲に

文法を文法として研究すること即是なり。文法の目的の中、最も肝要なるものとす。かくてよく文法を知る時は巧に言語を取扱ふ事を得べく、又一般分類上の智識を得ると共に精確に論理的に事物を研究する力を養ふべし。殊に中等教育等に於いて最此の必要あるなり。

三 文法の種類

各國語文法、比較文法、時代文法、文語口語、方言文法、標準文法、混合文法

我が國語には其の文法あり、清、英、獨等の國語またその文法あり。是各國語文法なり。異なる國語の文法を比較するは比較文法なり。同じ國語も時代によりて相違あれば、その一時代を對象としたる時代文法あり。我が國語にては奈良文法、平安文法、鎌倉文法、江戸文法、明治文法等あるべし。されど是はいまだ著書として見るべきものなし。近來僅に口語文法、文語文法の別を認むるに過ぎず。同國語中、方言の文法また無かるべからず。近時數所の方言文法書出でたり。文語口語の共に標準とすべき規則を專に述べたるは標準文法ともいふべく、普通の文法書は多く之を目的とせり。我が今説かんとするは、標準文語を主として各種の語をも比較すべく、一種の混合文法なり。

四 文法の三部

何種の文法にても、之を音韻文字篇、詞辭篇、文章篇の三部に分ちて説くが自然の要求なり。されど中に就いて詞辭篇その中堅たるは争ふべからず。學修する者、最意を此に致すべし。

第一篇 音字

第一章 音字

一 言語と聲音

言語は意義ある人間の聲音なり。人が思想を發表するに言語の外にも身振、手眞似、眼付などあれども、最明確なるは聲音に依る言語なり。言語は聲音に依るも、意義ある聲音ならざるべからず。意義なき聲音は言語にあらず。さて之を記すものは文字なり。故に言語文字の間に密接の關係あるを知るべし。聲音言語は人種に依りて異なり。是各國語の起れる所以にして、言語異なれば文字も随つて異なるは從來の大勢なり。

二 文字の種類

音字と意字との二あり。音字には成音文字、音韻字あり。成音文字とはイロハの如く一字一音を表し、音韻字とは a b c の如く數字相依りて始めて一成音を表すものなり。悉曇、諺文など後者に屬す。意字は漢字及古代埃及文字の如きものなり。

我が國太古には文字はなかりしならん。所謂成音文字なる國字即ち假字は中古時代に至りて作

られしものなり。我が國にて字のことを「ナ」と云ふ。「ナ」とは物の符牒の意義を有す。漢字名と似たり。故に假字を「カリナ」「カンナ」「カナ」と云ふ。假字に對して漢字の「ナ」とを眞字と云ふ。假字は我が國の固有の文字にして、次は漢字次は擬漢字なり。擬漢字は我が國にて作れる文字にして、國字ともいへり。辻、麴、島、榊など其の數三四十あり。麴、衆、衡などは日本合字とも云ふべし。假字に片假字、平假字、變體假字の三種あり。この外に合字といふものあり。二字を合して一字とせるなり。即ち「ル」の類なり。「ナ」及「メ」は「コト」及「シテ」の合字にあらずして、事及爲の略字なり。又符號には、「く」「へ」「へ」「？」など用ゐらる。

三 諸聲音

(1) 成音 母韻 子音

國語の聲音は五十音圖の諸音の如く皆一成音成熟音なり。而も之を母韻子音に分解することを得。羅馬字の如き「アル」「ワ」「ベ」「ツ」を用うれば、最明瞭に之を悟り得べきが、我が假字のみにも説明せられざるにはあらず。

まづ「アイウエオ」は氣息が聲帯に觸れ顫動して起る音の口の開方の廣狭扁圓の如何によりて五つに分るゝものにて、其自身一個々々の成音とも見らるれど、又「カ」「サ」「タ」「ハ」「マ」「ヤ」「ラ」「ワ」等諸行音に通じて根本の韻なれば、之を母韻といふ。

カキクケコの如きは氣息が聲帶を顫動して出づる時に喉頭及舌根に激し觸れ、さて前のアイウエオの場合に於ける口の開方（ア）によりて成る者にて、それより母韻を除けばカキクケコの子音となる我が國にては之を表す者なしクよりウの母韻を除きたる者、カキクケコより母韻アイウエオを除きたる者は是にして、成音クと稍相近き者なり、サ行音以下すべて之に準じて知るべし。子音といふ語當らざるが如くなれど、慣用上之にて通ず、子音を父音と呼び、成音を子音と呼ばんといふ説もあれど、一般に通ぜず、兩者の稱を混すべからず。

近代の口語この子音を發すること有るが如くなれども、之を表記するには從來の如く成音假字を用うたゞ、シのみは子音なるが、後の撥音の所に言ふべし。

(2) 成音の種類 四あり

平短音 撥音 促音 長音

(1) 平短音 平短に發する音なり、その子音によりて又二種三類に分つ。



直音はアカサタナハマヤラワガザダババの十五行の音にして、撥音はキヤシヤチヤニヤヒヤミヤリヤギヤジヤヂヤビヤピヤククググの十四行の音なり、直音はスナホに、撥音はネヂケたる音

の義なるが、發音學の上より言ふ時は随分議論あり、ヤウ行音を拗音なるやうにいふ人もあるが如くなれども、表記文字の單直なるを直音といひ、複拗なるを拗音といふこと、習慣上より定りたりと心得て可なり、通俗に言はむに、カ行音のカキクケコと拗音のキヤキユキヨククと比較せば明なるべし。

清音はその子音清澄なる者、濁音は其の清音の子音を少しく聲帶を狭めて重く鈍く發する者、半濁音は兩唇を觸れて鋭く反撥せしめて發する者なり、此の半濁音といふ名は習慣上の名にして實は不當なり、又ハ行濁音は此の半濁音を濁れるなれど、すべて慣用の名に従ふなり。

拗音に於いては前述の外に近代は、オトツツア、ゴツツオウ等の「ツア」「ツオ」もあり、他にも又言ひ得る者あるべけれど、文語を主として、之を略せり、キヤとククとの類を區別する爲に俗ながらヤ行拗音、ウ行拗音と呼ぶ事あり。

さてこの平短音の數を見るに、音の轉訛をいはず

清直音は五十音圖の五十

濁直音はガザダバ行の二十 計七十五

半濁音はバ行の五

清拗音はカサタハマヤラ七行アウオ三列及クの二十二

濁拗音はガザダバ四行三列及グの十三

半濁音はバ行三列の三

計三十八

通計百十三なるが、その中「ミ」は言ひ易けれども通常の國語になし

(ロ)撥音 前項の語の後を撥ぬる者にて、鼻音、鼻聲などもいへり平短音の下に「ン」を添へて之を表記し、合して一聲音なり、「ン」は單獨に發せられず、故に之を呼ぶに上にウをおきて「ウン」といふ是文字の名なり、假字の中、發音以外の名あるは唯此の「ン」のみなり、さて「ン」はナ行の子音の撥ねたるものと見るべし(マ行の子音亦「ン」に轉ず)

直拗音百十三すべて撥音となり得べけれど、國語に用ゐざるも多し

(ハ)促音 直拗音平短に發せられず、その氣息口内に於いて促る者なり、之を表すに「ツ」「フ」字を假りて平短音の右下に稍小く記す、亦合して一成音なり、而して常に下他音に接す、此の「ツ」はカサタハバ行等の子音の轉訛の如くなるが、分解せず、一成音と見なす

(ニ)長音 直拗音平短に發せられず、長く引く者なり、その表記法三様あり

一 純粹の國語には母韻を添ふ

ああ しいえ つう せい せえ 古をを等

此のオ列音なるにはオを用ゐず、ヲを用ゐること古書の用例なるが、新しき書には、オを用ゐたるもあり(コヲロ) 古事記、鹽こをるこ ナヲ 源語、夢浮橋、涙のおつるを、はづかしと思ひたりなど 二音に發したるにはあらずるが如し(どう) のう おう(を)等は新し

二 漢字音にはイキウを添ふ

せい(西) へい(兵) する(水) こう(工)等 (紅) 蕉

三字音以外の新外國語には「」を添ふ

ア一チ(寫聲) チ一フ(芝罘) ソ一ダ(曹達)等

近來文部省にて小學校にては漢字音の長音にも此の「」を用ゐること、規定せり國民すべて之を用ゐる様になるべきか、未知るべからず、この符號を特に發音を表す場合に用ゐることとは何種の語にも差支なし

(3) 諸音と文字

音と文字と道理上一致せざるものあり、今平短清濁直音をとりていはんに、ヤ行の「イ」とワ行の子とは今の發音ア行のと同じく、文字も區別せられず、キエヲは文字は區別すれども、發音はア行のと略同じ、シチツは清濁共にや、拗音の如く發音せられ、従つて濁音に於いて混同生ず、フの子音はハヒヘホと異に、唇を合する所、同行ながら別種の音なり、拗音も之に準ず

ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
		ti	tu		
		chi	tsu		
		shi		se	
		shi		she	

ナ行	ナ	ハ ^h	ニ	ム	メ ^h	ホ ^h
ハ行	ハ	ヒ ^h	△フ ^f	ム	ヘ ^h	ホ ^h
マ行	マ	ミ	△フ ^f	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	リ	リ	ユ	レ	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	キ	子	エ	エ	ヲ
ガ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ヲ
ザ行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ヲ
ダ行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヲ
バ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ヲ
パ行	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ヲ

四音の變化

音の變化するは廣き音便に外ならざれども慣例により之を五種に分つ
 1. 轉呼 他音の下にてハ行の音をワ行の音に呼ぶ(本來の國語なり)

例 あは^{awa}(粟) いひⁱⁱ(飯) いふ^{ifu}(言ふ) いへ^{ie}(家) かほ^{ka}(顔) 等

これ子音hが或はWと換り、或は默せるなり

古くは他音の上にも轉じたるものあり「わかる」別は「はかる」「うり」瓜は「ふり」「わしる」「走は
 「はしる」「わづか」「僅は「はつか」より轉ぜるを見るべし。

みちのべのうまらのうれにはほまめのからまるきみを波可禮かゆかむ(萬葉二十)

アツ通用 「あがつ」「わかつ」(顔)「わかる」「あがる」「われ」「あれ」「我」
 ハマ通用 「はだら」「まだら」「はぐれる」「まぐれる」「わけ」「まけ」

てにをはの「は」もすべて「わ」と發音することとなるが、或る地方には尙「ハ」と發音するもあり。

2. 二短音が一長音となる 「あふ坂」の「ふ」が轉呼により「う」となり、「あう」が「お」となるが如し。
 更に之を細別すれば、

ア列音の下にウ音來ればオ列の一長音に轉呼せらる。甲、雜などの字音も然り。

イ列音の下に「う」又は轉呼「ふ」ある時はウ列拗長音となる例、邑^{いふ} 瓜生 桐生 萩生 等

ウ列音なるは すふ(吸) くふ(食)など、或は一音なることあり、或は二音なることあり、空の如き字

音および「くうて」(食)のクウは一長音なり

エ列なるはオ列の一長音となる例、ふ(醉) 今日^{けふ} 蝶^{たて} うれふ

オ列なるは 劫^{せき} 乞^こ 添うて(二音を一音に讀む) 赤穂^{あかほ} 真岡^{まおか} 青梅 「俗言に物を棄るをほをると云も」

3. 連聲 撥音の下なるアヤワ三行の音が變化してナ行となり、或はマ行となる(撥音ンは舌内n唇内m)

其の一、ナ行となる(舌内n)

觀音 因縁 算用 輪廻 親和 親愛 善惡

其の二、マ行となる(唇内m)

三位 陰陽(感應) 探幽と呼ぶは實は誤なれども、今はそれにて通用す

促音の下の音はタ行となる

闕腋 舌音 八音 雪隠 發意(新發意)

特例ラがタとなることあり

出來 (此の外にはなし)

右の外似合ふ、仕合、一越、別役、後尾(シツポツポ) う、ち、るなどあり

○撥音の下のハ行音

心配 軍配 看板 甲板 勤番 印板 案配 心法 傳法 三把 三八(二十四)

三步 關白 煎餅 蓮府 蓮歩 半白 按分

○促音の下のハ行

壓迫 一杯 爵憤 法被 切符 屈服 發布 失敗 切羽 出帆 薩兵 十把 接賓
日本 突張

4. キクがカサハタ四行に接して促音となる

此の時從來假字を變へず、ひきかく、引さく、六方、獨歩、六遍、ひきたぐる、ひきはぐ、等の如し、イツカといふ假字の如き「幾日」なるか「一荷」なるか「一個」なるか知るべからず、イツカと書けば誤るとなけれど、又「イク」を一促音に發することを表すこと能はず、現時は兩様の表記法あるなり

右の「3. 連聲」、「4. キクが……促音となる」は更に連濁、拗音すれあ、なけあ等と共に音便中に收むべきか。

5. 音便 總べてその假字を變ふるを以て特色とす、此に四種あり、長呼い、長呼う、撥呼ん、促呼つ、是なり

甲、長呼い キシの二音イに轉ず例、書キて kakite—kaite kの子音默す

乙、長呼う クヒの二音ウに轉ず例、言ウて hite—ite hぬけ iが uに變ず、同じウす onaziku—onaziu kの子音默す

丙、撥呼ん ニミビの三音ンに轉ず例、讀ミテ yonita—yonte—yonde

丁、促呼つ チリヒの三音ツに轉ず例、取ツテ

此の外にも此の四種に變ずる者あれども、今は最普通なるをいへり。

今更に之を他の方面より見るに、所謂音便は左の二種となる。

(a) 二音が一音となるもの、此に二種あり。

其の一、子音黙するもの

其の二、子音變じ、或は母音も變ずるもの

右に擧げたるは皆この(a)に屬す

(b) 一短音が長撥促音となるもの

再この兩種を前四種に配して説明せん。

甲、(a)カ行ガ行四段活より「て」「た」に接する時及形容詞の「き」「い」に換る只「行く」のみ促音となる。サ

行四段活も或は「い」に換る。増して指して上方の音待て「此は方言なり」單語にては「權(カキ)

朔(ツキ)タチ、衝立(ツキ)タテ、同年、私(ワ)タシ等。

(b) 四時、詩歌、弑、見、偽、來、はい、見ろい、あい、おい、やい、か(疑意)い、

六日(昔)はムユカと云ふ、ちいと、きいと、等。

乙、(a)形容詞のクがウに換り又ハ行四段活より「て」「た」につゞく時ウに換る。

有り難(ク)ウ、宜(ク)ウ、ごきげん(ク)ウ、カウ、遅(ク)ウ、全(ク)ウ、忝(ク)ウ、戰(ク)ウ、云(ク)ウ

思(ク)ウ、又商人(アキウド)、獵人(カウド)、困(ク)等もあり。

(b) 夫子、八日、給ふ、さう、どう、もう(も)は今なり、行李? (其ウ、此ウ、而して)

丙、(a)マ行バ行四段活用及ナ行變格より「て」「た」に續く時

富(ミ)ンデ、飛(ビ)ンデ、死(シ)ンデ、飲(ミ)ンデ、(ノウ)ダは方言、給(ビ)ウデ

(b) 真中、ちやうわんに盛りて(大和)

假字(カ)リナ、後取(シ)ンドリなどは單語中の變なり、件(キ)ン、榛(シ)ン、お(や)りなさい、分(ワ)らない

丁、(a)ハ行タ行ラ行四段活より「て」「た」に續く時、言(コ)ヒテ、立(タ)ツタ、取(ツ)ツタ

(b) 眞暗(白黒)青直、唯、きつと(急度)、さつぱり、どつさと、しつかと、あつばれ

國語の音は平短音が元にして、此が變化して、或は撥音となり或は促音となり或は長音となれり。

古代の言語には長音は少々ありしも、撥音促音などは全くなかりしなり。

尙次の例を考へ見よ

大船爾末加伊之自奴岐 (萬葉二十)

麻字氣受

あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはり行く(古今物名友朋)

おほいまうちぎみ (古今)

かちおん(勝臣)

箒、皮茸、小路、首、栗田

町刈田、我、張る、一五、
 岸破(太平記)、つきさく、
 さかん、よん所、そんなら、とんや、けれど、かほばせ、ほとんど、かちどり、とんび、
 をん、めん、あんまり、
 とつくり、やつぱり、よつほど、眞向、まかんづ、ついで、はんべる。
 於毛乃末以多利、又於毛乃末以奴侍中群要(三)

五 假字遣

現今假字遣に關して二説あり甲、表音的假字遣乙、語原的又は歴史的假字遣是なり。
 甲は近來の新説にして異なる字を書きて發音せしむるは悪しければ宜しく發音通に書くべし、
 となり乙は古來襲用の説なり今この兩説に對し孰れを採用すべきかを考察するに、書く上に於
 いては甲法便利なるが如きも讀む上に於いては頗る困ることあり例へば「コーテ」と書けば「買
 うて」なるか「えうて」なるか判定し難きも、乙法に依りて「カウテ」若しくは「コウテ」と書けば一見してそ
 の意義の「買」若しくは「乞」なることを知るを得べし近時佛國にても表音的を排斥して、やはり語原
 的を主張せりといふ言語獨貴く文字は何にても好しとの説は妥當ならず現在通用の日本語の
 みならず古代の日本語をも知悉する必要あり假字遣を表音的にするは弊多ければ宜しく語原
 的を採用すべきなり。

古も定家假字遣の如く一種の私説を立てしことあり一體假字は語原的に記す時はツカフと
 いふ語不當なり假字は私にツカフべきものにあらず有の儘に正しき古來の書方に従ふべき
 ものなり尤も新しき音を生じたる時は新しき表記法を定めざるべからず。
 兼載雜談三「かなづかひといふことおをいるのさかひとのみ心得たること淺き事なりかなづ
 づけに有也たとへば夕さればとか、んをゆふさればと書くほどの事なり」

第二章 漢字音

一 成立分類及體

- (1) 漢字は畫より成立つ畫集りて字をなす畫には一「コ」乙「フ」の如きもの約二十五あり
- (2) 漢字を分類するに形よりすると音よりすると二あり形よりするものを部首といふその數約
 二百ありその左にあるを偏、右にあるを旁といふ外に冠、垂、脚等幾多の名稱あり名なきもあり。
 (イ)偏 イ才ネ彳 (ロ)旁 彳頁 (ハ)冠 宀 (ニ)垂 厂广彳 (ホ)脚 辵走彳 類
 なり

(3) 體とは書體にして楷行草あり楷書の元は隸書、隸書の元は小篆、大篆等なり。

後漢	許慎の説文	九三五三字
魏	李登 聲類	一、一五三〇字
晋	呂忱 字林	一、二八二四字
後魏	揚承慶ノ字統	一、三七三四字
梁	顧野王ノ玉篇	二、二七二六字
唐	廣韻	二、六一九四字
宋	集韻	五、三三二五字
明	字彙附補彙	四、五五五〇字
清	康熙字典	五、七二一六字

二字音即音

元支那の語なりしを當初日本に持ち來り習ひしものにて、支那音が多少の轉訛を受けて日本の音となれる是現行の字音なり、支那にても古音は大に變轉したるを以て支那現在の音とは大に異なり。

- (1) 一音なるもの、音、阿、以、馬、

(2) 二音の如く聞ゆるもの、第、此の字は假字にて記せば二成音の如く聞ゆるも、實は一成音なり、章、塔の類共に一成音なり、國、コク、一、イツ、共に我國語にては二音に呼べど、實は一音なり、假字を幾つ用うとも、一漢字は一成音なり一體支那語は單綴なり、字音は結局一音に過ぎず

三韻の假字

二個以上の假字拗音を除くにて表せる字音の下の韻に當るものを韻の假字と云ひ、凡そ十種あり、い、る、う、む、ぬ(今は「む」「ぬ」の代に「ん」を用う)、ふ、つ、く、ち、き、是なり、韻の假字といふ名は俗稱なれども便利なれば用う

- (1) い、アエの二列音に附きてイ、ウ、オの三列にこれなし

例、愛、階、大、西、禮、(「ヤイ」なし焙は唐音、かほのいは別なり)

- (2) る、ウ列音のみに附く

例、水、推、錐、鈍、對、唯、維、遣、類、疊、累

- (3) う、アイウエオの五列音に附く

例、孝、修、通、朝、條、能

- (4) む、m唇内、アイエオの四列音に附く

例、感、嚴、三、陰、伊、甚、夷、濼、隅は轉訛、燈、心、美、甘、紐、口(河内石川郡又感政)、汗、衫

鹽治(止屋) (下覃垣垣咸上寢感淡賺去沁助艶陷)

(5)ぬ n 舌内五列音に附く

例 寒 元 散 乙訓 雲梯 遠敷 信濃 因幡 員辨 (眞文 痕 寒 先(上) 軫 吻 阮 旱 潛 銑(去) 震 問 寸 翰 諫 霰) 日本の昔には、ン(の如き撥音なかりき) (盆 錢 綠 蘭 讃岐 近衛)

(6)ふ アイエオの四列音に附き、ウ列音にはこれなし

例 狎 甲 雜 挿 塔 納所 法度 蠟 獵 拵 急 吸 集 執 十 習 蝨 入聲 立 葉 脊 怯 業 接 姜 攝 聶 攻 葉 公 蝶 貼 法師 劫 鴨綠江(アリナレ) 漢字に四聲とて平、上、去、入の四韻あるが、い、る、う、んは平上去の三聲に混入すれども、ふ以下の五韻は入聲の韻に限る

(7)つ ち 五列音に附く、ツは漢音、チは吳音なり

(8)く き 五列音に附く

例 惡 郁 福 役 益 德

う韻は原音のuとngとを合す(喉内) 上 shau—shang 廣 kwan—kwang 東 tou—tong 二内とは喉内唇内及舌内を云ふ

四音韻

短韻五、長韻八、撥韻九、促韻二十、合計四十二韻あり(是は前の「韻の假字」といふ如き俗稱にあらす)左の如し

1. 短韻	a	i	u	e	o
2. 長韻	ai	ei	ui (uwi)	au	iu
3. 撥韻	an	in	un	en	on
4. 促韻	ap	ip	ep	op	ak
	eti	oti			iku
					uku
					oku
					iki
					eki
					atu
					itu
					utu
					etu
					otu
					ati
					iti
					uti

さて之に附く子音 換言すれば四十二韻に對する子音字母は直拗の清濁、半濁を合せて二十八音あれば、道理上一千七百七十六種の發音をなし得らるべきも、實際それだけでなく、假字書の字音約四百六十ある中、現今の發音に隨へば連濁を合せて僅に三百七十七音あるのみにして、過半数は音韻の組合せ出來ざるなり

附言 1. mim なきにより min 旻をみ、ともかり、任もにむなるをみまとかる

2. 陸法言は二百六韻とし、南宋の劉澗約して百七韻(平、上、去、三)つ、入十七とし、清の毛奇齡百六韻とす、北京官話は百六七十種の音よりなる

五字音の種類

漢音吳音及唐音あり日本に早く傳りしは吳音なりといひ或は又漢音なりともいふ漢音は支那北方の音にして吳音は南方の音なるが繼體天皇の朝に支那より佛經を持來りしは南方の人なりしかば吳音の方早かりしなるべきか次いで北方の漢音來り兩音混淆せしかば奈良朝より佛書は漢音にて佛書は吳音にて之を讀ましめたりかくて漢字は大抵漢音吳音の二種を有す今佛書を讀むに吳音の混ざるは戰國時代に五山の僧侶佛書を傳へしにも因るべし漢字は同音にして異義なるもの多きが支那は一音に對し四聲を具ふるも我が國にはこれなき代に漢音吳音の別あるは實際上便利なりともいふべし唐音とは當時に於ける支那音にして宋以後の新舶來音をいふ黃檗宗にては讀經に明音を用うと云ふ

例、「日」の字漢音ジツ吳音ニチ 昨日 今日 唐音にて、普請(鎌倉時代よりの語) 外郎(員外郎が賣り出しし藥) 行宮 行燈 看經 明清

漢吳音を比較すれば其の種類大略左の如し(漢音は右に記し吳音は左に記す)

1. 清と濁
2. ザ行とナ行
3. 大治
4. 時
5. 現
6. 顯
7. 彦
8. 上
9. 貧
10. 凡
11. 土
12. 神
13. 讀

所	7. 拗音	6. 直音	5. 長韻と短韻	4. パ行とマ行	3. ダ行とナ行	2. ザ行とナ行	1. 清と濁				
處	io	ak	長	男	二	大	大				
居	iau	ek	韻	乃	見	治	治				
去	iou	au	短	内	汪	十	十				
御	iok	ei	韻	武	汪	時	時				
呂	と直音	ak	韻	美	忍	現	現				
相	o	a	韻	武	人	顯	顯				
向	au	と拗音	韻	美	肉	彦	彦				
香	ou	iak	韻	武	弱	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
強	ik	iok	韻	武	若	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
鳩		ia	韻	武	如	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
象			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
像			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
興			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
矜			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
極			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
續			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
億			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
食			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀
式			韻	武	入	上 <td>貧</td> <td>凡</td> <td>土</td> <td>神</td> <td>讀</td>	貧	凡	土	神	讀

8. クッ 行とワ行
帙 色 職 直 辱 獨 綠
回 淮 穢 黃 皇 橫 九萬士相狹丸

(附) 狎 蕙 (雀亂)

○ 漢吳同音 鴨 楷

9. 短韻列の變

a と e, 下家夏牙假(馬)亞 i と o, 己(古音)期 茶 a と o, 个(箇)個 買
i と e, 衣依 是氣 o と u, 父都奴 五步 (附) 維 惟

10. 長韻(i ai と ei

西體弟第 米帝禮宰才絲 講巷通 桶痛勇用重
11. 長韻(u) au と eu, au と ou, ou と uu, iou と iuu, eu と iu,

hop

12. 撥音(n m)

an と en, in en と on, en と an, am と om, an と on, un と on,
13. 促韻(p f) ap と op, ap と ep, ep と op,
細 間 限 監 還 諫 山 品 今 近 金 音 懇 勉 飲 食 權 建 獻 言語 元

14. 促韻(ち t) at と ot, it と ot, ut と ot, et と at, et と ot, at と et,
法度 法師 夾 峽 業 劫 脅
七 質 八 物 沒 月 越 殺 (附) 別 節 結 切 罰 達 鉢 撥 一 逸 律 筆

15. 促韻(き k) ak ik と ok, ak ek と iak,

濁 咳 六 陸 格 億 昔 益 益

六字音假字遣

ツカフこととの論、前章國語のと同じ是は個々の字につきて之を知る外に途なきが大數をいへば左の如し。

1. オー (アウ) 央 殃 殃 益 奧 輿 櫻 鶯 鸚 嬰 櫻 以下 吳 拗 吳 音 (オウ) 應 謳 嘔 歐 歐 (アフ) 狎 鴨 押 壓 咽 (ワフ) 王 往 枉 旺 汪 庭 皇 凰 黃 橫 皇 以下 漢 泓 (ヲウ) 翁 甕 瓮 雄 嫗
2. コー (附) (カウ) 高 稿 鎬 豪 膏 浩 羔 阜 翺 樺 好 考 號 昊 梟 岡 綱 剛 鋼 康 糠 亢 抗 航 昂 仰 向 香 鄉 強 庚 坑 行 衡 更 梗 硬 亨 杏 羨 幸 耕 耿 擊 董 香 殺 膠 交 郊 效 校 按 孝 教 巧 江 項 講 巷 降 江 以下 吳 迎 など 百三十餘字 (コウ) 公 空 控 孔 工 功 紅 攻 虹 貢 鴻 洪 口 扣 叩 吼 垢 苟 鈎 寇 寇 厚 侯 候 喉 后 後 恒 恒 肯 肱 蕤 弘 興 など 七十餘 (カフ) 合 蛤 閣 洽 恰 夾 峽 夾 闔 甲 匣 (コフ) 業 劫 怯 脅 吳 音 (クワウ) 光 晃 恍 魘 廣 贖 荒 宏

16. リヨ一 [リヤウ]良兩亮梁量糧涼涼勉令靈など [リヨウ]龍菱陵凌綾稜楞 [レウ]了聊料寮療療療僚僚廖廖など [レフ]獵獵

17. ユ一 [イウ]尤郵幽憂優由油柚遊猶猷攸悠酉酉誘有宥囿又友右祐 [ユウ]勇雄熊融裕など [イフ]邑挹揖燭

18. キュー附ギュー [キウ]九鳩仇久灸咎柘臼舅舊求裘毳救究丘糾蚪紉廐休朽弓躬窮宮牛 [キフ]急及汲吸笈給泣翁歎

19. シュー附ジュー [シウ]周秋愁啾秀州洲酬囚曾道收蒐臭袖岫醜驪舟羞繡獸修首授受就酒手守狩聚驟柔蹂衆終充嵩翁戎從縱主など 兼以下シユウ [シフ]十什汁拾入摺摺執集緝緝葛輯澀濕襲

20. チュー附チュー [チウ]宙抽袖胄及紐肘肘耐籌時晝稠稠中仲沖沖忠蟲衷重柱拄注註駐住株誅殊厨踰頭偷 中以下チユウ [チフ]蒼蒼

21. ニュー [ニウ]柔乳 [ニフ]入 [ビュー]附ビュー [ヒウ]彪膠膠

22. リュー [リウ]留溜驪柳劉流旋隆龍 [リフ]立笠粒 [イ]伊以異怡易已移夷肆貽怡倚頤圮彘 突意謎衣依依 [井]爲章位威謂涓偉委萎尉惟維唯帷遺遙恚鮪遼園闌慰畏胃棠葦 [井キ]域域闕 [イク]育昱郁彀など [イツ]乙一壹逸佚溢儉

23. オロ [オロ]烏烏惡乎など [オク]憶憶億 [ヨク]屋 [オツ]乙 [ヨツ]越臘 [オン]恩隱音など [ヨン]溫韃縻袁など

24. イ井 [イ]伊以異怡易已移夷肆貽怡倚頤圮彘 突意謎衣依依 [井]爲章位威謂涓偉委萎尉惟維唯帷遺遙恚鮪遼園闌慰畏胃棠葦 [井キ]域域闕 [イク]育昱郁彀など [イツ]乙一壹逸佚溢儉

25. エエ [エ]哀埃愛依依 [エ限]穢回會給淮壞廻晝烏 [エイ]英嬰嬰纓嬰盈盈贏贏贏影郡映榮營營永詠泳穎翳曳洩裔泄銳睿睿 [エイ]衛 [エキ]益亦奕易液腋掖釋釋釋駁役疫 [エツ]謁嗑咽悅閣 [エツ]越粵日鏡 [エン]煙宴燕讌振偃鹽炎琰奄淹簪厭閨麗延演焉衍羨沿鉛筵捐緣など [エン]袁遠轅猿園爰援獲浚宛苑怨婉鷺垣寬 以上吳音オン 淵媛媛圓

26. オロ [オロ]烏烏惡乎など [オク]憶憶億 [ヨク]屋 [オツ]乙 [ヨツ]越臘 [オン]恩隱音など [ヨン]溫韃縻袁など

27. ジチ [ジ]自次辭慈事字寺侍時時似似二貳耳餌兒爾爾爾而 [チ]治持痔尼賦備など [ジキ]食 [チキ]直 [ジク]熟肉 [チク]竺軸軸軋 [ジツ]實日 [チツ]昵昵軋 [ジン]甚尋腎盡迅訊人仁及忍似壬任姪柢荏 [チン]陣沈塵

28. スヅ [ス]受從など [ツ]豆頭圖途徒杜 [ス井]隋隨隨瑞瑞 [シヤ]蛇邪閣磨 [シヤク]寂雀若弱鶻昔 [チヤク]著 [ジュ]樹壽受豎需儒孺濡入 [チユ]、 [ジユク]粥熟塾 [ジュツ]述術逮戊恤 [チユツ]求隸 [ジュン]淳惇准盾閏順旬逡純遼など

29. ジョチヨ [ジョ]序敘徐舒助鋤想絮如汝茹筍 [チヨ]除杼女絮 兩音あり [シヨク]辱辱辱 [チヨク]濁

第二篇 詞 辭

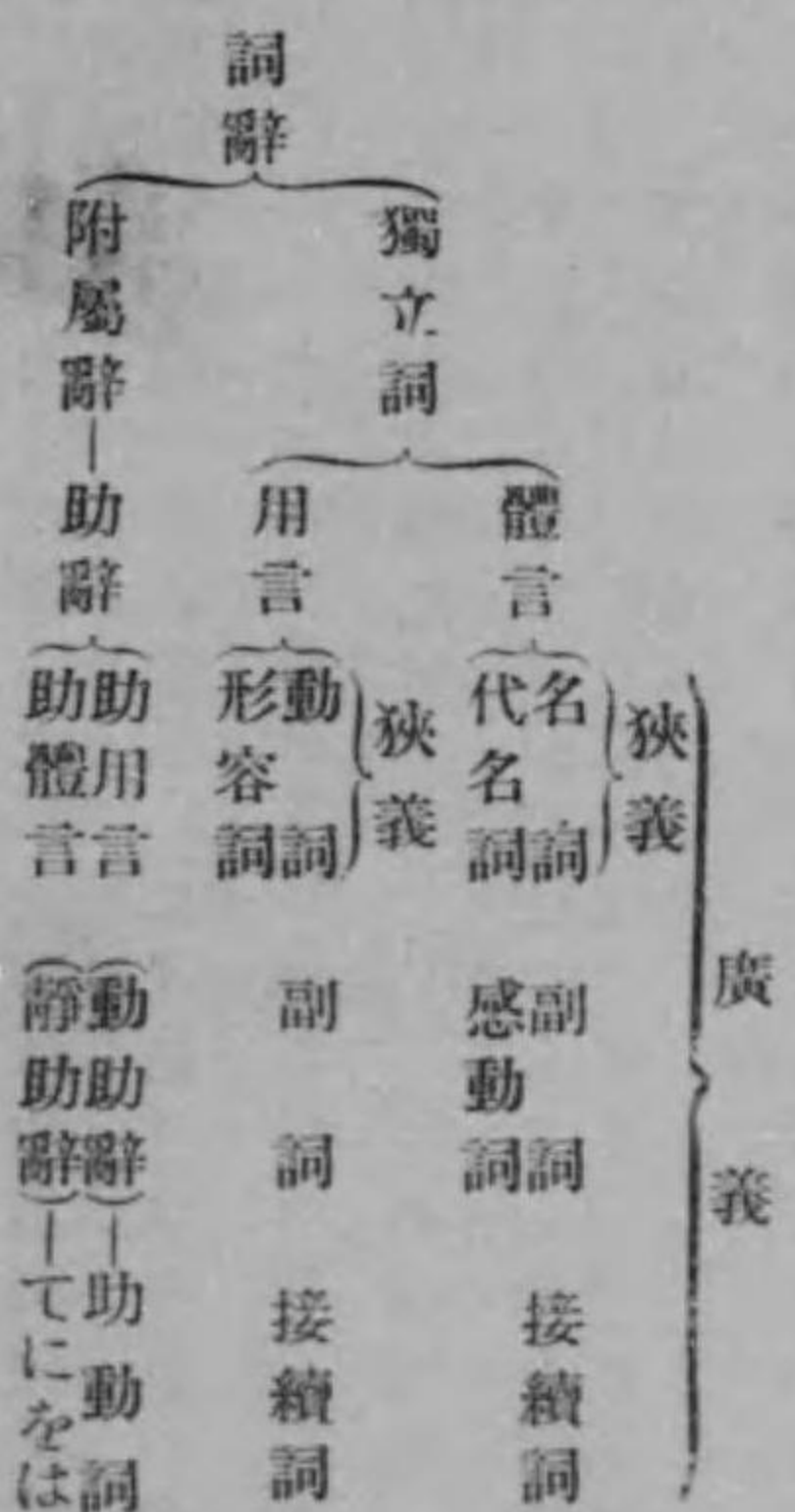
第三章 言語の分類

一 分類の標準

言語を分類するに、一は形態上よりし、一は性質職掌上よりす。

(1) 形態上の分類

是我が國古來の分類法にして、主として語尾變化の有無により分てるものなり。即ち左の如し。



獨立詞は獨立にて意義あるもの、附屬辭は獨立にて意義なきものなり。獨立詞は更に語尾變化の有無により、體言と用言とに分つ。昔は詞辭の分類單純なりしかば體言を名詞代名詞とし、用言を

動詞形容詞とし、他の副詞接續詞感動詞等は寧ろ問題外として分類せられざりしなり。文法の學漸く進み分類亦随つて複雑となるに及び、副詞接續詞感動詞等もその形態上よりそれ々々分類せらるゝに至れるが、是意義の分類にして、此等を體言用言に配する意義古と異なり。

(2) 性質職掌上の分類
この分類法はその初蘭學者等が外國の書を讀むに當り、彼我東西文法の對比より起れるものなり。

甲 獨立詞

名詞	事物の名
代名詞	名詞の代用(代指)
動詞	動作
形容詞	性状
副詞	動作狀態を修飾(限定)す
接續詞	語句文をつなぐ
感動詞	感動

乙 附屬辭

二 詞辭

上に述べたる標準によりて言語は七詞二辭に分つ。

(1) 獨立詞

各論に至り詳論すべきを以て爰に之を論ぜず。

(2) 附屬辭

甲 助動詞(助助辭)

(1) 動詞に附くもの

相 (使) 被る、さる、しむ

打消 ず、じ、まじ、あり

時 (完了) ぬ、たりり (いま)

推量(想像) む、べし、まじ、まし、らむ、らし、めり、けむ

希望 たし

(ロ) 名詞(或は代名詞)に附くもの

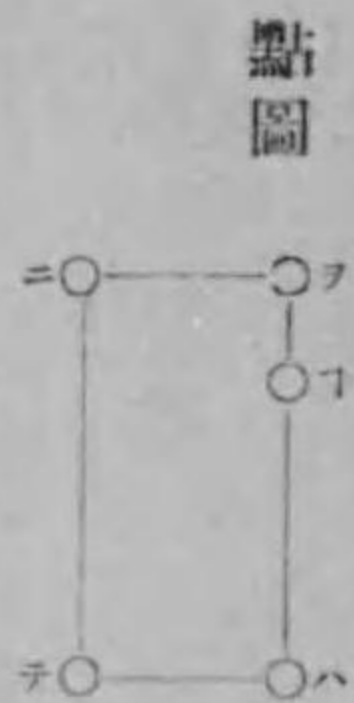
助動詞 又は動助辭を補ふ。他詞の意義を補ふものなり。
てにをは 又靜助辭ともいひ、形の變化なきものなり。諸詞に附きて關係感嘆を表す。疑問の「てにをは」は廣義に於て感嘆の中に入る。

指定 なり、たり

從來「ごとし」といふ語を比況の助動詞として扱ひたれど、こは形容詞に屬すべきものにして、助動詞にはあらず。後の形容詞の所に詳論すべし。

乙 てにをは 靜助辭(村上織、助辭といふ)

古く漢文を讀む便法として漢字の四隅に圈點を附し、以て「てにをは」等に讀み分けたり。之を「を」こと「點」といへり即ち左の如し。



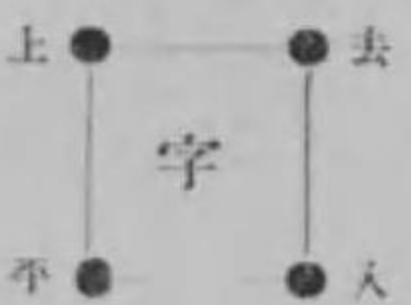
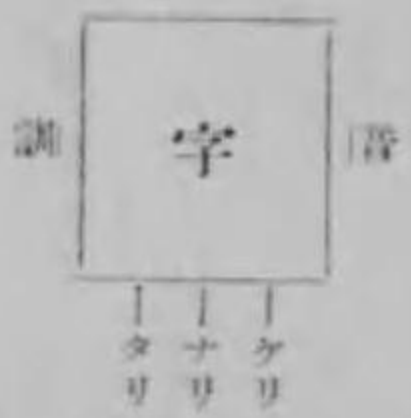
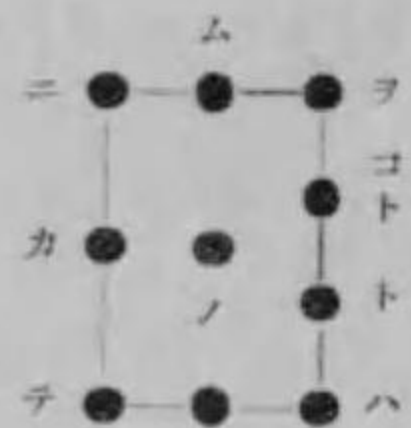
例へば 學時之と書きて「學びて時に之を」と讀むなり

「てにをは」の稱此より起れり(梅尾道敏明和七年「網引綱」二卷を著して之を斷言す)

(註) 中右記云寛治元年十二月寅今日未刻許有御書始事、以式部權大輔正家朝臣爲侍讀、

以左大弁敦宗爲荷復、其儀如式云々件三點圖正家朝臣御書始所註也白色紙小作

子書付之無表紙



(案ズルニ之明) 經家ノ點也

(イ) 名詞(或は代名詞)に附くもの

が、の、に、を、へ、と、より、から、まで (つ)

(ロ) 動詞に附くもの

ば、ども、とも、て、つつ、を、に、も、が (と)

(ハ) 諸詞に附くもの

は、も、ぞ、や、か、なむ、こそ、のみ、ばかり、すら、だに、さへ、かし、よ、
が、な、し

右は「てにをは」を所屬の詞によりて分てるものなるが、更に其の意義によりて分つときは左の如し。

(イ) 關係の「てにをは」名詞に附くものは格を表し、動詞に附くものは法を表す。

(ロ) 感嘆の「てにをは」「はも」の類にして本來感嘆よりおこり轉じては諸種の意義を有するに至れり。

(ハ) 添意の「てにをは」

(項ヲ設ケタルノミニテ説明ナシ—編者)

三 接頭尾語

接頭語は他語の頭に接し、接尾語は他語の尾に接して、一詞となり、夫々意義を添ふる語なり。

例へば我^代らは^代、初^名春^名、か^形なし^形さ、^形古^形い^形の、^形に^形ひ^形な^形の(出雲)の如し。
古は之を冠^名、春^名などもいひたり。獨立詞にもあらず、附屬辭にもあらず、他の獨立詞に附屬してなほ一獨立詞をなす所注意すべし。廣日本文典に概略挙げたれば就きて見るべし。但接尾語につきては随分むづかしき問題あれど、今は言はず。

第四章 名詞 代名詞

一 名詞の種類

(甲) 名詞を大別して次の二種とす。

(イ) 普通名詞

(ロ) 固有名詞

普通名詞は一種屬に通じて用ゐらるゝも、固有名詞は一々個々の名なり。かつ無意義にして命名の自由あり、換言すれば普通名詞は國語によりて自然になれるに、固有名詞は特別故意的に命名せられたるものなり。

さて固有名詞は個々の名なりといへば、「源」の如き氏の一族に通ずるものは普通名詞なりやとの疑起るべし。されど「源」「平」などいふは別に確なる意義あるにあらず、かつ一團體の特別固有の

名なるを以て之を一種に通ずるものとせずして、なほ一個體に附せられたる名とすべく、従つて固有名詞とせざるべからず、もと普通名詞は一種屬の名なれど、時として唯一個の名にして猶且普通名詞なるものあり例へば「日」の如し、「日」は天空に唯一個存在するも「日」といふ名は故意的命名等の性質なく自然にいひたる名にて、もし二つ以上の日現ればなほ皆之を「日」といふべければその普通名詞たること明なり。

固有名詞は一面に必普通の名あり、普通名詞は必しも固有の名あらず、固有名詞「日本」「富士」「秀吉」「小鳥」「磨墨」等は普通名詞「國」「山」「人」「刀」「馬」等の固有の名なれど、未開の地には命名せられざる山川あり、野蠻人には名と稱すべきものを有せざるもあり、畜類、動物、植物、器具等には通常固有の名を命ぜられざるが如し、而して固有名詞は多くは普通名詞又はその他の詞より轉來せる者なるが、更に普通名詞に變ずることあり、茲に又記すべきは普通固有共にその名に廣狹ある事なり。「生物」「動物」「鳥」「雀」は等しく普通名詞にして、「源」「足利」も共に固有名詞なるが如し、又「書」「歌書」は普通なるが、「萬葉集」は固有なり、今萬葉集は版本幾千萬部ありとも普通にあらず、又「團十郎」といふ名、幾人に命ぜらるるとも固有たるを失はず、こゝに於て普通固有の別は事物の數に關せざるを知るべし、なほ普通名詞は別國語に翻譯し得べきも、固有名詞は然らず。

性質を表す普通名詞

半平、三助、唐傘、天竺あふひ、くれなる、メリケン粉、朝鮮あさがほ、高野豆腐、和蘭

いちご、東コート、東郷下駄、バナマ、備後表、七鳥、小倉織、博多、チャウ、甲斐絹、丸善いんき

命名の自由

普通名詞 隠元、南禪寺、サツマガスリ (ネルソンは英の東郷なり 西郷も西郷だ……)
固有名詞 正宗、白鷹、ダイヤモンド

(乙)次に成立より之を見れば

(い) 本來名詞 例 國、山、人、日、源

(ろ) 拔萃名詞(又抽象) 例 戰、働、仁、忠、平

に別ち得べし。(い)は本來のものなれど、(ろ)は他の語より轉じたるものにして、動作又は、性狀より抽象拔萃し來れる名なり。

一つ、二本、三戸は個數、四里、五尺、六圓は名數、七つめ、第八、九番は序數、ひとふたは語根とも接頭語とも云ふべし。數詞は種々の用法あれども、本來は名詞といふべし。

右の外に無形名詞、有形名詞、集合名詞、物質名詞等の名あれど、無形有形は事實上のことにして、言語上の事にあらざれば、贅名なり、集合物質は數の關係のやかましき西洋語には入用なるも、日本文法には不用なり。

附言 熟語の名詞を構成上より見れば

まろ	おこと	そこ
それがし	そ文字	か奴
やつがれ	貴様	かかれ
わ文字	御身	がし
自身		それがし
自分		(卑)
あ(紀州野上)	な(長岡の奥)	
ワタクシ	ワシ(出雲)	
ソレガシ	オレサマ	
ミ	ワレメガ	
ワレラ	メガ	
ミドモ	ソナタ	
身共ラ	ソナタサニ	
ミヅカラ	ソノ方	
ワラハ	コナタ(貴所貴方)	
ワガミ	コナタサマ(御邊)	

サヌキ典侍「黒戸の道をおれらしらぬに教へよ」
 大日靈貴此之於保比屋咩能武智むちこ、は獨立詞みことと同じ
 汝が身のほど(落窪下)

しがあれば(記) しがつくる(紀)

しがないば(紀)

間もなく我に歸る

おれは何事いふぞ(宇拾十)

私の茅屋に御入候て (太平記三十三)

わたくしらは云 (義經記)

貞任 紹巴ヲ

紹巴 貞任ヲ

いざうれ源太(平家二度の懸)

やうれ夷のくなたぶれ(平田)

やノ延ナリヤをれトモ(靈の眞柱)

「しゃつ」は「しやつ」か「そやつ」か

「なむぢ」の「な」は本来「むぢ」は大己貴などの「むち」の如く、敬語の接尾語なりそれ今は敬意を失へり。

「わたくし」も亦轉じたるものにて、主上を國家、公など申すに對して臣下が自稱せしより來れり「き

み」は名詞より、「あなた」は方角の遠稱より、「手前」「御前」「まろ」「自身」「自分」なども皆名詞より來

れり。「それがし」の「それ」は事物の不定稱なり。「もじ」「さま」などは名詞より轉じたる接尾語なり。「先生」「宅」「宿」などは名詞なり。

第三人稱には全く本來の代名詞なく、他より轉用し、近、中、遠の別あり。是國語の一大特徴なり。漢文入りてこの語法少しく亂され、歐文入りてその直譯の爲に著しく亂されたり。國文を學ぶもの最注意せざるべからず。「これ」「その人」「その君」などいふべきを「かれ」と指して怪まぬ人多し。

三 數及敬語

(1) 數 日本語には正確に數を表すことなし。唯複數を表すには、

(イ) 接尾語「ら」「ども」「方」「達」等をそふ。東ら、西ら(畿内、中國) 是の如き等の(アミダ經訓) 敬語としてつげらるなり

(ロ) 接頭語「諸」「幾」などをそふ。「諸人」「幾世」の如し。

(ハ) 語をたゝむ。「われ々」「人々」「山々」「木々」

されど複數にても此等の形をなさぬものあり。又この形の複數が常に複數のみを表さずして單數をもいふ事あり。かゝるものは「の如きもの」「など」などの汎稱の意となりて謙遜の意を含む。

謙遜 わたくしども 我等 人ども 子ども おいら みども
(2) 敬語 名詞代名詞の敬語は動詞のと異にして、比較的簡單なり。

(イ) 本來の敬語としては、

君、すめらぎ、あなた
の如し。

又接尾語接頭語を附して敬語を表すもの甚多し。

(ロ) 接頭語

御(みぎよ) おほみ おほん おん お平安朝ノおハお前、おもと、おもの、おまし、おとど、

お身(記) 宇都志意身(記、雄略)

みはかせ(御佩刀) おほみき(酒) おみ帯

「おみ輿」「おみ酒」などはミコシミキにて敬語なるに、俗人之を忘れて更に「お」を添へたるものなるが、「おみ帯」「おみおつけ(汁)」「おみあし(足)」の如きは敬語を重ねたるにはあらで、口調その他の要求よりオミコシ、オミキ等の「おみ」を添へたるなり。

御みきのみだれさせ給ひにしなり(大鏡、道隆) かゝりける御佛を少しにてもおろかなり
けんは(落窪四) 現御神(續紀) 明御神(出雲神賀)

又「お」を人の名の上に附す

阿 お花、お仙(仙千代丸といふ本多作左衛門の男なり)

是等は寧ろ敬語にあらずして親愛美稱なり。

(ハ) 接尾語

女御、父御、嫁御、(是こそ殿の父御下野殿の御首よ(長門本))

の如きあり殿、様、君、公などを添へて敬語とするあり。「殿」はもと「宮」「殿」の「殿」にて人を直に指さずしてその居處をいひて敬ふなり。「様」は「有様」の「様」またその主體を直接に指稱せざるなり。但「足利殿」といへば殿は接尾語なれども「保元物語」などの「高松殿」「白河殿」といふ殿は名詞なることに注意すべし又敬語として獨立に「殿」と用うる時は接尾語にあらずして名詞なり。

「陛下」「殿下」「閣下」「足下」は二人稱の接尾語なり然るに「閣下」より以上は今三人稱にも用ゐらる甚しきに至つては「殿下」を一人稱に用ゐるしことあり秀吉の如し「殿下」を三人稱に用ゐしことは頗る古しなほ天子様と先生様との比較も面白かるべし。

「御」と「様」とは所有者を敬すると、主體を敬するとの異あり。

天子主體さま、あなた所有者を敬しての御帽子。

御人、御方、御客、御神人様、御僧忠度ニ二三處アリなど轉用と見るべきか。

この區別往々忘却せられ濫用せらるゝことあり他の母なる人をその子に對して「御母上様」といふはよしおのれの母に對して「御母上様」といふは大なる誤なれど今の慣用よりいへば一種の特例として許容せざるべからざらん。

かみさま若君様義經記、公方様富士御覽雅世富士紀行、六波羅様平家、禁裏様康富記、公方様園大曆、かんの殿玉葛内侍ヲ源氏、關白殿攝政殿と御前にていふ海人藻芥、父さま花子さまおきく様狂言記、(司馬相如が論巴蜀檄に陛下を三人稱に用ゐたり)

女名のき。

いぬき(後戀)、昔の承香殿のあこき(後秋下)、いぬき(源)、あてき(葵)、あれき(竹川)、こもき(手習及順集)、みのきほめき、すいき(榮花)、みはてぬ夢、あとき(落窪)、たてきあやき(空穂、藤原君)

四格

格とは位格の義なり。名詞代名詞が文中にて他の詞に對して如何なる位にあるかその位をいふなり。例へば

甲乙うつ

といふ文は、

- 1. 甲ト乙トガうつ
- 2. 甲ガ乙ヲうつ
- 3. 甲ヲ乙ガうつ
- 4. 甲ト乙トヲうつ

といふが如く、格一定せざれば、その意味明瞭ならざるを以て格を確定し置かざるべからざるなり。

格を分ちて左の七種とす。

- 一、主格 二、領格 三、副格 四、處置格 五、呼格 六、同格 七、並立格

(1) 主格 は文の中にて、動詞形容詞若しくは他詞の主となるものなり。

(イ) てにをはなきもの

花主 (美) さく わ 主 (ゆ) く べ し
(美) し わ (男) なり

(ロ) がのを添ふ

汝主 が い ふ 所 は

鶯の なく

鳥が なく

がの共に咏歎的婉曲にするものにして、その係る詞の下に名詞あるを例とし(換言すれば連體語の主となる然らざるは極めて少数なり。古文乃至近文にてもがの意義稍認識せらる。而してのはがよりも多く用ゐらるれども、今代口語に比すれば極めて少し口語にては、主格はがを添ふるを本則としのを添へたるものは文語の本項の用法をなす「雨が降る」「雨の降る日」の如し(漢文讀には下に體言なき主格のがなし)

(ハ) はもぞやか(なむ、し、こそ、だに、すら、)の類(さへ、のみ、ばかり)を添ふ。

是等は皆自ら固有の義ありて右の(イ)の場合に添ふるものなり。他の格の是等にてにをはを添ふる者亦同じ。

雨は も 降 る

こぞ (降 れ)

などの如し。

はは提示し、區別し、抽出し、感歎する意あり。

此の時楠正成は

薩摩の士早田八右衛門(ト云フモノ)は元文二年五月任滿ちて大阪の藏屋敷より歸ることになつたが

.....
(支那人ノ名)は年月日我が家を訪はれたり云々(大江敬香)

杉浦重剛翁は云々(賀會案内)

神沼河命坐葛城高岡宮治天下也(記、中)

父病氣の處

もは重ね咏嘆する意あり。

目も見えないのに學問が出来

ぞは強指する意あり

こそは更に強指する意あり

やかは咏嘆し疑ふ意あり

なむは和かに取りあけて指す意あり

だにさへすらは一を擧げて他を類推せしむ

だに ナリトモ、デモ、サへ(消極)

すら スラ、デモ、サへ(中間)

さへ マデ(併加)積極

のみばかりは單一の意なり

はを添へたる主格とがを添へたる主格とは意義大に異なり近時此のはがを濫用する者多

し嚴に區別せんことを要す但はの極めて軽く用られたるはがと大差なきもあり

彼が途中で友人に出あつた時、あすこにあるのは私の小さい時に通つた學校ですから、私と

一處に来て見て下さい」と申しました(名古屋高工)

氣毒な憐むべき猫は久しくそこに留つて私の邪魔をした(四二、二三、讀賣)

君は手で飯を食ふよりは頭で飯を食ふのはすきであるか(商船入學試験)

庭には櫻、垣には山吹にほへり

文法は富士谷氏歌は景樹勝れたり

……は是

……が○○なり

(2)領格 は名詞に接続して所有者を表す又關係形容をいふものもあり

國の財産 人の頭 金の冠

秋の旅 日本語の研究 雪舟の畫

ニ於テスル

ニツイテスル

ニツイテカケル

長沼賢海 一名丸覺信の後の夫たる禪念房の子

惠澄覺信の妾たりし日野廣綱の子

いづのむつになり(忠岑)

子供の遊ばせ方

銀座の通、山の道、越路、大山海道

春宮の女御(紅葉賀)

人妻とわがのとふたつおもふにはなれこし袖はあにれまされり(好忠集)

(イ)のをそふ。るのしし、かのしし(著聞集)

(ロ)がをそふ

「の」と「が」とをそふるには自ら慣例あり

梅がえ——梅のえだ

君が代——君の代といふは稀なり

天の河——道のべ

(ハ)てにをはなきもの。

藤原道長

「藤原の道長」といふべきのを省略したるものにて、氏は名に對して領格なり。

東京飯田町

「東京の飯田町」の意にて、東京は飯田町に對して領格なり。

右の例は固有名詞のみなれど、

私父

「私の父」の意にて「私」は「父」に對して領格。

貴君御兩親

「貴君の御兩親」

の如きもあり。

八百萬神もあはれと思ふらん犯せるつみのそれとなければ(須磨足槍之山橋乎(萬七))

木戸、木野戸、木ノ戸(天和真土山の邊紀伊ノ門の意)

筑前「灘」を那珂郡

紀國那賀郡(同上なり)ナシガ(土音)

兄は米國弟は英國のドクトルなり。

出雲者新墾にひばりの十握ほの稻(顯宗紀)

貴家皆様……

小宅主 一同叙 無異

小宅修 一同叙 無異

小宅テハ家族カ? 一同ニ 無異

古語につをそふる者あり。一種の領格なり。

沖つ浪 天つ神 庭つ鳥 外つ國 種つ物 眼つ毛 眼のこ 安麻能日繼(萬十八)

此等は近代語にてはつの代にのを添へずむしろ之を略して熟語とするものなり。「沖浪」「にはとり」「たなも」などの如し。

(ニ)指示代名詞 代名詞の中此「其」「彼」「孰」など「れ」を略してのを添ふる時、半形容詞とな

る之を指示代名詞といひ、領格と分つ。

こ
そ
か
わ
な
た
お

こ	れ	ノ、ニ、ヲ、ヘ
そ	れ	ト、ヨリ、マデ
か	れ	リ
わ	れ	リ
な	れ	リ
た	れ	リ
お	の	リ

コノ項ニモトガヲ入レタルヲ削除シテ大
正十二年三月二十一日ト朱記セラレタリ

(重衡縁によりるたりけるぞそなりける(盛衰記四十五))

右の中にてこヲそヲは古の語なり。今の普通文には用うべからず。

領格代
この表紙(この帳面の表紙)

事物場所方角を都べて指示代名詞といふ人あり。その名稱は今用るす。

(ホ) 副詞(體言の)にかゝるもの。

天地のむた

風のむた

猶「例のあそぶ」の如きもあり。

(3) 副格 は動詞に對する間接の目的及形容詞の目的となるものなり。

紙に字を書く。宇治川の水は茶に宜し。

右の如く直接のものに副ふなれば「副賓格」といふも可なり。而してこれには「へ」とよりからま
でを添ふ。

(イ)に 抑ふる義ありて目的を表す。

紙にかく。君に捧ぐ。

茶は宇治に産す。

學校に通ふ。水氷ト(化)になる。

貧に屈せず。富に誇る。

對の間に聞きなし給へり(往吉)

人を馬鹿に見る。

馬を鹿にいふ。

松風を琴に聞く。

襪に短く、帯に長し。

圓形は見るにさやけし
寝ぬるに早く仕事を始むるにおそし。
目に見、耳に聞く。 足にはく。

枯野を鹽に焼き、其があまり琴に作り(記下)

病に(テ、ニテ) 倒る
風に(ニ) 倒る

我は丈夫(指定) 動詞にあり
侍候いまりふおはす
おはしす
おはします
ごい
ござる
なり(助動詞)入らせらる
肯定の時

庭なりける櫻(新古詞書)

肯定の時は「にあり」をつめて多く「なり」といへど、否定の時は今文も「丈夫にあらず」「丈夫ならず」同様用う。

○風になびく。

○高根コリテおろしになびく草木。
副詞小句

○忘れるるに かつし
るるに こと

にを省く時は下の濁ること

奥山之木葉隠ひ而行水之音聞從常不忘(萬十一)

おきめもやあふみのおきめあすよりはみやま賀くりてみえずかもあらむ(紀十五下)

いはがくりかかよふ玉(萬)

いはがくります

(ロ) はもと邊の義にて、名詞より轉じたる接尾語なりしが助辭になりたるなり

東京(邊に)出づ (何方) 萬コレハ副詞ナリ

「西に行く」といへば確に定めていふなれど、

「西へ行く」は漠然とさし、方角又はその邊を表す

「隅田川南へ流る」は方角を表す。然るに漢文讀にて「南に流る」といふことはその目的を表したるものなれば、決して誤にあらず。されば「へ」はなくとも日本語は書き得べし又

君へ捧ぐ

君に捧ぐ

は共に同一にして「に」と「へ」とたゞ語氣の差あるのみ

こゝに置く 場所に「へ」を用う。

「へ」は弱く婉曲にその邊をいふなり口語にては多くの場合に「に」を「へ」と換へうべしされど

丈夫にあり

風にたふる

水になる

などいふ折に「を」「へ」とし難し

但し口語を婉曲に「へ」といふはよけれど文を書くに「へ」を亂用するは縮を失ふ

「へ」は形容詞の目的なるには用ゐるす。

(ハ)と 抑ふる意ありて「稱謂」とも云ふゆゑは「……といふ」と用ゐて稱し謂ふ意なればなり(さ

れどよき名にもあらず)

馬を鹿といふ

東京といふ處

四の君おもしろの駒ノコトいはれていとみじとおもふ落窪二

こゝに得たまふ同じことミカ大將ノ詞ミカ(落窪四)

さるに「と」を略していふあり中國地方に多し

東京いふ處

の如しその意は解しうべけれど「と」といふ抑なければ縮なき心地す

枕草子に「と」抜きの事あり就いて見るべし又「あらんすらん」といふは、「あらんとすらむ」と

いふべきを「と」を抜きて云ふなり

水ミヅとなる
「と」「に」「かよふ」
になる

君と遊ぶ

といふ時は抑ふる意にあらずして與同の意なり

これと同じ それと異なり

の如く又形容詞の目的にもそふ

花雪ハユキとふる 彈丸雨ダンガンアメと飛ぶ

の如く用ゐられたるは雪と雨とにて副詞をなせどその元は「雪と等しく」「雨と等しく」な

どにてなほ副格なり

(ニ)より、から 起點發點を指す

「より」は文語の如く「から」は口語の如く思はるれど實はさならず

より (近文に用ゐる比較の時は口語に用ゐ)

から (古文及口語に用う)

東京より出でたり。發點を表す。

霜葉二月の花カラよりカも紅なり。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ。

よりの比較を表すはなほ比較の發點を事物に取る義なり。

この發點を表す「より」「から」が所由依託を表はすことあり。

酒は米より醸す

或は

徒ニテより

舟デから ゆく

人の前から通る

然るに

彼は 一度失敗したる處

發點より

再擧の勇なし

こは發點より轉じて原因を表すなりこれ更に轉じて今の口語原由を表すからとなるなり。

雨ふる處カより行かす

暗きイカクより見えず

見るカより厭になる

是は「見るまゝに」などに通ず。

(ホ)まで 着點を表す。

大阪まで行く

「まで」は終局の點を表し、それより先へは前まざる意をいふなれど、「に」「へ」は目的として定めたる地又は方角をさす。又

(あ) 苔のむす まで

(い) 人のとふ まで

は皆 魚程 の中のものを一の名詞と見て用うるなり

(う) 御印まで の み ばかり に 代 へ て

(あ) いは積極的なれど(う)は消極的なり自ら異なるを見む。

(え) 風まで吹く

こは併加の意にて、此の例は主格なり已上種々の意あねど、元をいへば同じ事と知るべし。

「まで」は形容詞の目的なるに用うるは稀なり。(これまで同じ) 路駒返まで(平なり)

(4) 處置格 は他動詞の目的となるものなり。
(イ)「を」をそふ。

酒をのむ

(ロ)てにをはなきもの。

酒のむ
路知れる人
矢をりかけ

我は煙草君は酒をたしむ

(ハ)前二項に「は」「も」「ぞ」の類を添ふ。

酒をもは
をば のむ

(三)「の」をそふるは多く上に撥音ありての變なり。

二人のもの共大納言の左右の耳に口をあてて、いか様にも御こゑの出づべく候とさ、
やきて引き立て奉れば(平家)
これも心のすべきによりてなり(千訓抄)

(5) 呼格 は呼びかくる名詞にして他の詞に對して獨立するものなり故に獨立格ともいふ。
風ふけ

といふに風は吹くといふ動詞の主たるべきものにあらず獨立し居るなり又「ふけ風」ともいひ
得べし是に二種あり。

(イ)てにをはなきもの。

汝こゝに來れ
諸君よ、諸君、諸君は……

夫差 汝 越人の汝が父を殺したるを忘れたるか

(ロ)「よ」「や」「かな」をそふ。

風よふけ / たこ上れ
(口)の形親愛の意あり。(イ)の形
瓢や瓢や我汝を愛す

わが君が代や(感嘆)
坊やはよい兒

の如き「や」は呼格の爲につけられたるが忘れられて意味なき一種の接尾語的のものとなり
たるなり

回や愚ならず

賜^{威的主}や始めて與に詩を言ふべし

の如き主格を感嘆的にいひてなほ主格なるものなり。

此の日や天氣晴朗

日やを名詞と見れば呼格なれど、こゝにては副詞に轉じたり。

彼^主や實に當代の俊傑なり

「や」を添ふるも意味上より主格と見るべきなり。

花^主や咲く

是は疑の「や」にて論なく主格なり。

更科^主やをばすて山

さゝ波^主や滋賀

朝倉^主や木の丸殿

石見^主のや高角山

河内野の^主やかたしき山の(六帖)

いではのや

錦の^主や紐とく花と見ゆる哉堀川百首

招^主くか野邊の花薄(コハ連體法ニツクルや)かナリ。

右は「の」を略し又は略せずして「や」を入れたる感嘆的領格にて呼格とはいふべからず。かく領

格と呼格とは往々相混同するを以て注意すべし。

(ハ)古格 「こそ」を添ふ。

忠こそその君 普通の係結の「こそ」にあらず

姫許曾 接尾語の様になり變りたるならん

右近の君こそまづ物見給へ(源氏帯木)

(ニ)修辭上間投格やうのものあり呼格に準すべし。

淡路島(ツレニ)通ふ千鳥

川社(ツレニ)しのをりはへほす衣

命なりけりさよの中山

(6)同格 是他的名詞を説明するものなり

國學院^{同格}といふ學校

私の親爺^{同格}の太郎兵衛

(イ)てにをはなきもの。

文部大臣^同牧野

私父^同太郎儀云々……

吾人身を學界におく者

吾々人民は……

年比もいのりなどし給ひし吉水僧正かの長歌の座主のたまひつかはしける……(増鏡)

新島守

(ロ)「の」を添ふ「が」を添ふるは後世なり

弟の次郎を呼ぶ

但しこは時に主格とも領格とも見うべし

牧野の大臣

學生の佐藤

老爺の權助

是等には慣用あり

日本(本館)

日の神

守(守)

丹つゝじのにははむ時の櫻花さきなむ時に……(萬六)

安御てぐらの足幣の

八束穂のいかしほ

萬千秋の長秋
よき日の足日

富士の山 ふじがね 鶴が岡 龜が崎 高天の原頭 それの國 某の人 これの學校

(ハ)「なり」「たり」を添ふこの中に三種あり又指定辭を添へずして中止するもの亦同格たり

(1)「なり」「たり」を終止に用うるもの

鯨は哺乳動物なり

牧野は大臣たり

君君たり

(2)「なり」「たり」を連體に用うるもの

長官たる東郷

(3)「なり」の中止にて用うるもの

木曾は張魂なる男にていひたちたることを……(盛衰)

(4)煙管は兩端は金中は竹なり

父は大將兄は博士弟は畫家なり

(ニ)「といふ」を添ふ

佐藤といふ學生

何ノといふ
事

いふを獨立動詞と見れば、佐藤と何とは副格名詞なり。されどこのといふはちふてふなど略してテニハの如く用ゐらるゝにより、大觀する時はといふをそへたるが同格名詞となるなり。

兄なる者 母なる人

「なる」といふとは詞全く異なるによりて濫用すべからず。多くは固有名詞の下に「なる」を附せず。されど伊勢物語に、

母なん藤原なりける
在原なりける男

とあり。こは決して怪しむに足らず。何とならば一人の藤原にあらず、在原にあらず、廣く藤原在原といふものなればなり。即ち是等は一の集合體なるを以て猶「なる」を附しうべし。

正直なるもの

形容詞の意ならは正

さて又普通名詞なりとてすべてなるといふべきにあらず。なるといふと意義の全く異なるを忘るべからず。一齋點頃より此のなるといふ用法漢文讀に行はれ、遂に現時の文に大不都合をおこせり。

哺乳動物なる鯨(正)

鯨なる哺乳動物(不正)

右の例によりて「といふ」「なる」の區別を知るべし。

(尙つぎの諸例につき考へむ)

うつゝにて夢なるものは長き夜のねざめにおもふ昔なりけり(續古今十九)

あしかれとおもはぬ山のみねにだに生ふなるものを人のなけきは(詞花)

住吉の岸に生ふなる忘草

老らくのこむといふなる道

近江にかありといふなるみくり

火鼠の皮といふなるもの(竹取)

戀すナルてふ名

今ノといふ 今まで知らなんだ

學生ノといふ 學生

木ノといふ 木

魚ノといふ 魚

蟲ノといふ 蟲

腹がぐうくト云フはすありに通ふなりいふ
あり

誰しの人
たれといふ人(萬、十一)

きく人もあはれてふなる別にはいとど涙ぞつきせざりける(後二十)

「かつらなるニアルの場處のなるなりところ

處にまかり歸り云々」(元輔集)

前大納言光頼春身まかりけるを桂ニアルなる所にてとかくして歸り侍りけるに(新古、惟方)

豊雄なるもの(雨月物語、外三處)

昔久七なる男云々(頭書に久七は下をとこの名なり)好色伊勢物語

(7)並立格 は二以上の名詞が相並立するをいふ 他の詞に對しては自ら別の格あり

(イ)「と」を添ふ
名と利と併せとる

松下君と三上君とをとふ
の如し。されど
松下君と三上君をとふ
は「松下君と」は副格とも解すべし。各名詞に「と」を添ふれば混雜せず。されば各名詞に「と」をそふ

るを正則とするが如くなれど、古來の用例必しも然らざるものあり、
源氏濔標に

世の中のことたゞ半をわけておほき大臣とこの大臣の御まゝなり
とあるが如し又上に略して下にのみ添ふる例も多し

一の君 二の君 太郎君と三人おはす

紅梅のいと紋うきたるえび染の御小うちぎ今様色のいとすぐれたるとはこの御料(玉葛)

物見車大將中納言とをみて(國護下)

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける(宗于集、後撰七)

青柳梅との花を折るかざしのみての後はちりぬともよし

ソレハ甲と乙と二人がやらう

題名などは、下なるは「と」を添ふるに及ばず。

戦争と文學(ト)

「と」を附せざれば混亂するも、韻文などに「と」を附して拙となる時の如きは固より添へざるも
可なり

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける(宗于集、後撰七)

青柳梅との花を折るかざしのみての後はちりぬともよし

いもとわがぬる常夏の花

このいもとは並立格なりや副格なりや人によりて論あるべし「妹とせ」のいもとは明に並立格なり

(ロ) 助辭なきもの

徳禽獸蟲魚に及ぶ

禽獸蟲魚を一の熟語と見るべしといふ説あれど禽獸と蟲魚とは相離るべきものなれば然らず

四十年の春秋

といへば熟語なれど、

春秋の優劣

といへば相並べる並立格なり

英佛に遊ぶ

と同じ是等は熟語と混同する恐あり注意すべし

人は少くて侍ふ限みなねたりこの院の預の子むつましく使ひ給ふ若きをのこ又上童ひとり例の隨身許ぞありける夕顔

並

(ハ)「に」を添ふ 口語に多し

西洋の強國英に佛に獨に露あり

(英と佛と獨と露とあり)

「と」を用うると「に」を用うるとには區別あり「と」は對等に並列し「に」は先づ列擧するものありてそれに添へ附する心あり

(ニ)「や」「が」を添ふ

蕭やびはや笙の笛ひちりきなどふきあはせ竹川

英や佛は弱國なり

(或ハ、ノ如キ)

「や」はや、疑の意あり且感嘆の心地もす

紙紙か筆を與へむ

「か」は二者の一を選ぶ意あり

さてこのやかは必しも各の名詞にそふ事を要せず又「英も佛も一等國なり」などは主格名詞を二つ重ねたるものにて並立格とは見えず

(ホ)「なり」を添ふ 漢文直譯流に名詞の上に「曰はく」と添ふるに近し

英なり佛なり皆強國なり

(曰はく英曰はく佛皆強國なり)

副格 動詞
英といひ佛といひ……………
副詞小句(フリース)

「い」を添ふ

(文覺裸になり仰のけにふす蠅ぞ蚊ぞ蜂蟻などいふ毒蟲どもが身にひしととりついて
……(平家五)

この外

何とか、かとか

何だとか、かだとか

何だの、かだの

何の、かの

など口語に用う又

月にむら雲、花に風

の如きは並立にあらず動詞を除きたるにて、

月に村雲(アリ、カ、リ)

花に風(フク、アリ) の如し。

松に鶴、猫に小判

も亦同類なり。

已上にてほゞ名詞の格を網羅せり。

同一の形なれど意味よりいへば太だ異なるものあること左例にて一端を知るべし。

(1) 酒は百薬の長

(2) われ酒は飲まず

(3) 東京は九段下にすむ

(4) 東京は行かず

(4)の例は通常にあらず副格に「に」を省略するは少けれど、

帯木 をのこしもなん子細なきものは侍るめる

夕顔 くはしきことは下人のえ知り侍らぬやらん

葵 人の心こそうたてあるものはあれ

などの例は随分あり又こそその上には

保元物語 入道大に驚きくち惜しきことござんなれ

平家物語 さては惜しむござんなれ

など常例なり。

紀ノ一書 「不負於族」此云 宇我選磨概詳

こち來、こちよりては(天鏡)子立後の段

かゝりける御佛を少しにてもおろかなりけんはわが身の不幸なる目を見ん(に略カ)とて

こそ(しかナド略カ)ありけれ(落窪六)

夜や暗き路(こ)や感へる時鳥(古)

落窪四 まゝ子なんうれしきもの(秋香本)にぞありける(證)はありける(寛政十一年本)

平家八 云々申しつるは此處候ふぞかし

しばらく候ふ徳川殿 天晴候

○ア○イさます(花魁語)

平家八 兼平「千度きらんと申候ひしもこ、候ふぞかし」
同十二 土佐坊「知り参らせぬ候昌俊においては全く腹黒く思ひ奉らぬ候(數詞を補ふべし)と朱記あれど稿なし」

第五章 動詞

一 形態

一動詞を其の變化する部分と然らざる部分とによりて語尾と語根とに分つ。例へば「聞く」といふ動詞に就きて「ひら」といふ部分までは如何なる場合にも變化することなければ是を語根といひ「く」といふ部分は場合により「かきくけ」等と變化するにより是を語尾といふ。細かに論ずれば語根は更に語幹と語根とに分つを得べし例へば四段活用なる「さだまる」といふ

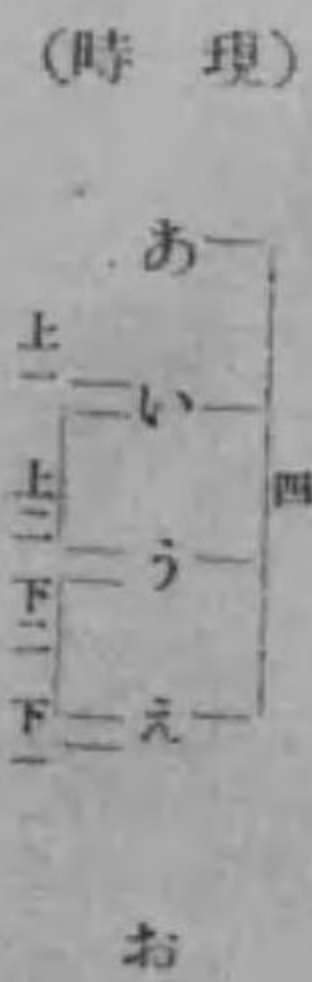
動詞に於いて「さだま」までは語根なれども「さだむ」と下二段に活用するときは語根の一部分なる「ま」語尾となるなり仍つて「さだまる」といふ動詞に於いて「さだま」までは語根にして其の中にて更に如何なる場合にも變化なき部分「さだ」を語幹とするなり。字義の上よりいへば「さだま」を語幹「さだ」を語根とするが妥當なれども暫く通稱に従ひ置くなり。尤通例文法上には語幹を論ぜず、

(1) 根尾の有無
多くの動詞は根尾の別あれども、一音の動詞にありては此の別を有せず例へば來、爲、得、經等の類なり。着、似、見、射、居等の語にありても本來一音の動詞にして「る」は語尾にあらず、副活と見るべきものなれば、又根尾の別なきなり。

- (2) 語尾變化の種類
- 動詞は語尾の活用により九種正格五種 變格四種に分つ(根尾の別なきものはすべて語尾と見る)
- (イ) 四段活用 「あ、い、う、え」四列に變化するもの
 - (ロ) 上一段活用 「い」二列本に「る、れ」副活を添ふるもの
副活を富士谷成章氏は靡ナヒヤといへり。
 - (ハ) 下一段活用 「え」二列本に「る、れ」副活を添ふるもの
 - (ニ) 上二段活用 「い、う」二列本に「る、れ」副活を添ふるもの
 - (ホ) 下二段活用 「え、う」二列本に「る、れ」副活を添ふるもの

以上(イ)より(ホ)まで五種を正格の活用とす。
 (ヘ)な行變格活用 四段活用本に「る、れ」活を添ふるもの
 (ト)ら行變格活用 四段活用の「い」列音にて終止するもの
 (チ)か行變格活用 上二段活用に「お」列音の加りたるもの
 (リ)さ行變格活用 下二段活用に「い」列音又は上二段活用に「え」列音の加りたるもの
 下二段の「せす、ずれ」に「い」列音の「し」の加りたるものとも、又は上二段の「しず、すれ」に「え」列の「せ」の加りたるものとも兩様に見るを得べし
 以上(ヘ)より(リ)まで四種を變格活用とす。

口語には九種活月中「な變」「ら變」「上二」「下二」の四種なきにより、總べて五種活用となる。
 古く中二段といへるは今の上二段なり、そは動詞活月中「お」列なるは極めて稀なるを以て「あ、い、う、え」の四列に就き「あ、い」を上、「い、う」を中、「う、え」を下と見たるものなり之を圖に示せば左の如し。



二 活用と行

活用の關するは清濁の平直音調四十四行なり。

(1) 四段活用 「か、さ、た、は、ま、ら、が、ば」の八行。

(2) 上二段活用 「かな、は、ま、や(射、鑄、わ、居、奉)」の六行。

射、鑄等の語は「や」行にして「あ」行にあらず。

(3) 下二段活用 「か」行蹴の一語。

上二段、下二段の語には根尾の別なし。

(4) 上二段活用 「か、た、は、強、誣、戀、ま、恨、試、や、報、悔、老、ら、下、戀、わ、用、率、が、過、さ、掘、だ、桶、恥、閉、攀、ば」の十

一行。 (楚辭九章涉江「忠不必用、賢不必以」以用同義)

○和字正濫抄卷二「もちる此假名いまだ慥なる證を勘へず常にかやうにかけり是正字な

らばはたらく時ももちうといふべし」(和訓栞古言抄、俚言集覽)

(5) 下二段活用 十四行總べてに關す其の中「あ」行の「得」、「は」行の「經」は共に根尾の別なし、下二段

活用にありて「あ、は、や、わ」四行は假字遺紛れ易きにより左にその語を掲ぐ。

あ行 得の一語

は行 極めて多ければ其の少き方を知りて他は「は」行とするを便なりとす。

や行 絶、斷、覺、生、宵、肥、越、冷、消、榮、費、潰、凍、煮、見、聞、癒、寒

接、吠、燃、殖、萌、聳、おびの、嘶ゆ、若ゆ、萎ゆ等約三十一「聞」は「は」行、「や」

源氏 義經記
行兩説あり甘ふゆ そばふゆ 饅

わ行 植、俄、据の三語

猶各活用中假字遣の紛れ易きあは、や、わ「四行及」さだ「二行を表にて示せば左の如し」

あ	行	四段約 (200)	上二 (3) カ	下二 (1) 得
は	行	上二 (2) 鑄射	上二 (3) 悔老	下二 (2) 約 (60)
や	行	上二 (2) 率居	上二 (2) 報老	下二 (3) 約 (30)
わ	行	上二 (2) 率居	下二 (3) 餓植 (ひう、くう)	
ざ	行	上二 (1) 掘	下二 (2) 据	下二 (7) 抽 <small>なつ、出づ、奏つ、秀、詣つ、燦つ、たつ</small>
だ	行		上二 (4)	

右の中「は」行四段は他に紛る、事なし同上二段下二段は他行の少き方を知りて残を「は」行と知るべし「さ」行上二段は「掘」の一語なれば他は「だ」行と知るべし「さだ」下二段にありてはその第一第二變化に於いて「ぜ」と「で」なれば紛る、ことなし

活用の轉(ハ行とヤ行、ワ行とヤ行)

萬十三 つ、じ花爾ホト太遙ホト越賣ホト作樂花佐可遙越賣
萬十九 春花乃爾ホト太要盛ホト而秋葉之爾保比爾照有家持チヌ處女墓ノ長歌

サク咲盛盛榮榮 サカフ四 サカユ

古義説 シナフハ、四 シナフハ、二 シナユ
ニホフハ、四 ニホフハ、二 ニホユ

闊フーモダユ。 教ユフ。 用フ。 強ユフ。 植フ。 据ユフ。 堪ユフ。 支ユフ。

古事記 鳴はさやサハルらすいすくはし鯨さサハルやる

萬五 百日しも行かぬ松浦路けふゆきてあすは來なんを何か佐夜禮留

萬五 すべもなく苦しくあればいではしりいな、と思へど子らに佐夜利奴

(さ)やにさわぐ。 さやぐ

シナビル シナブ シナフ (萬葉) シナエテ
(和名) 寔阿之奈爾 (古事記) 跛 足なふ なふ なの竹取 もだふ頼政集
落くぼ

たゆむ つよをいほお

(カ)フカヤス

三 變格と語

か行變格

「來」の一語なり同義の語ながら「來る」といふ語は四段活なり又「出來」といふ熟語にありては上二段の活用となれり。

さ行變格

「爲」「御坐」の二語に限る「爲」の字を「なす」と讀む時は四段活にして「成」の義なり「す」と同義にあらず。又體言の活く時例へば「筆す」「罪す」等又漢語の動詞その他外國語を活す場合皆此の格なり例へば「勉強す」「及第す」「ストライキす」等のごとし。又形容詞より動詞となるも亦然り例へば「重んず」「忝うす」「輕んず」等の如し(進ゼヨウ、進ゼタ、進ゼる、進ゼれバ、庄内、下一の如し。進)

な行變格

「死ぬ」「往ぬ」の二語なり蓋し「死ぬ」の語源は畢竟「いぬ」に歸すべし。

ら行變格

「有り」「侍り」「居り」の三語なれど「はべり」は語源「はひあり」「をり」は「るあり」にて共に「あり」といふ一語に歸す。

たとひ五人十人の子を失ひ侍るとも君だに代に立ち給はゞそれこそ本意に候へ(盛衰記)侍

ルトモ四段風にかはれるか)

むすめの齋宮に具して下り侍りて大淀の浦にてみそぎし侍るとて女御(女)子女王

大淀の浦にたつ波かへらすば松の變らぬ色をみましや(新古今十七)

……侍るとて夕顔侍(ラ)ムトテを侍ルトテといふか)

「ゐる」と「をり」とはその意似て差あり「ゐる」は輕くて單にその存在をいひ「をり」は「ゐたり」にて即完了存在を意味す

四 活用圖

九種活用の中、その變化の數を示せば、

四段 4、上一 3、下一 3、上二 4、下二 4、か變 5、さ變 5、な變 6、ら變 4

にて、その變化の多きは「な」行變格なり

活用圖を作るにその標準とする所、次の如し。

- (1) 「な」行變格の六形
- (2) 各變化の意義
- (3) 各變化の附屬辭

雨降れ

と命令に用ゐるたるは命令法にして、

雨ふらば……………

雨ふるとも……………

雨ふれば……………

雨ふれども……………

などは雨の降るといふことを主として云ふにはあらず、その次に來るべき文の前提として置きたるものにして、前提法といひ、或は條件法又は接續法とも稱す。

右の**ば**ともども杯は前提法を明にする爲に添へらるゝものなれば之を「法のてにをは」といふ故に是等のてにをはを省くも猶前提法たるを失はず。

口語にて

そんなら(バ)

したら(バ)

などいひて法のてにをはを略し、或は文語にても

花こそさけ(下モ)鳥はなかな

といひてどもはななくとも云ひうべし。

今大保方必可仕奉之止所念坐世(六) (廿六詔)

少將殿を始め參らせて幼き人々も皆とらはれさせ給ふべきよし承りて候へ(バ)急ぎ何方へも

忍ばせ給ふべくや候らんと申しければ……………(平家、小松教訓)。

人麿の歌に、

おほゆきのみだれてきたれ(バ)まつろはす立ちむかひしも……………

とあるが如きは「きたれ」の下に「ば」を省きたるものなり。

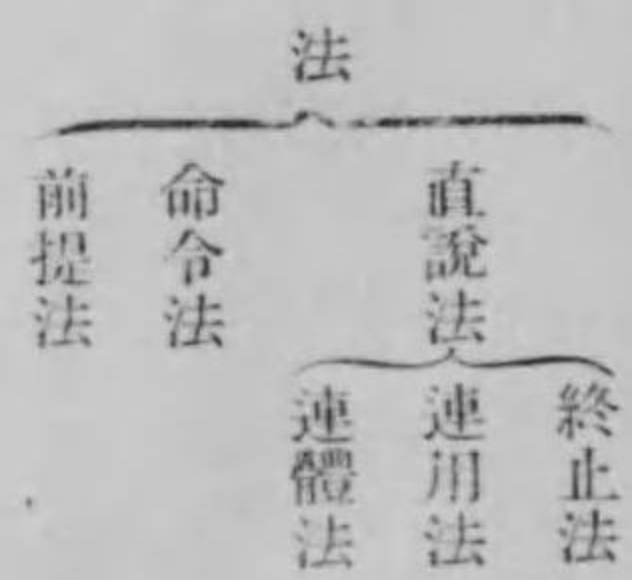
歸り來てしはぶれつぐれをぐよしのそこになければいふすべのたどきをしらに(萬十七)

の如きもつぐれの下の「ば」を省きたるもの。

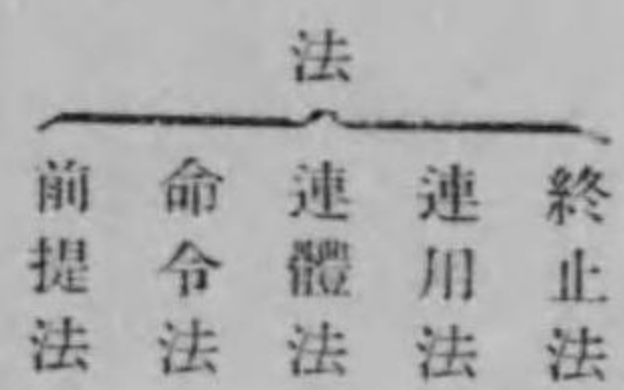
已下項を分ちて詳述せむ。

一、直説法

動作をありのまゝに直説するものにて終止、連體、連用の別あり故に之を終止直説法又は直説終止法などいふべし。されば



〔二六三二年寛永九羅馬府出版日本口語文典(下)ミニカン派宣教師 Fr. Didaco Collado 著〕には動詞の活用を論じて三種とし(1)交ズル 合スル 恥ヅル 案ズル (2)讀ム 待ツチ 殺ス (3)カクイフ 思イ 食とせるはこの直説法についていへるなり)とすべきを、



とするは通俗的にはともあれ理論上は委しからずといふべし。

(イ)終止法 動作をいひきりて文を終止す。而して終止法は動詞の第三變化を用うれども第三變化の形が常に終止法にはあらず。なほ口語の時の終止は文語の終止と異なるを以て注意すべし。

(ロ)連體法 體言に連續するものにて、體言は名詞代名詞と副詞(用言體言と)の一部分なり。この法には動詞の第四變化を用う。

(第四變化)名一體言
書く 筆

夏の夜はくる、すなはち明く

おほゆるやがて忘る

忘る故に後る

(一)の例は、職掌の上より觀ればゆるには副詞なれど忘るといふ第四變化の動詞はゆるといふ名詞に連り「それがゆるに」となりて副詞となりたるなり。

又連體法はその下に體言を略して名詞に用ゐらる

進むを退く

(二)の例の進むは明に名詞なり口語には「進むのを退ける」といふを以つても知るべし凡そのは名詞なるを示す爲のものなり)

右の如きものを動詞狀(形)名詞といひ略して動名詞ともいふ

終止法も亦名詞と見なさる

「死ぬ」といふことは難し

(ととうけたるは名詞の副格にして、即ち死ぬを名詞と見たるなり)

繁 信 治 勝 磐 掛 別 和 句 之 子 苞 茸 擔 毛 菟 之 子

の如く人の名に動詞の第三變化を以つて名詞としたるもの多し
又連體法にのを添ふるは非なり

進むの時 進むの人を退く

笑ふの輩 至れるの道

衣曝始午の日は昔より京中に上中下の人稻荷詣とて参り集の日也(今昔)

更に如此きの事を惜みて不隠して皆汝に傳へてむ(同上)

是等は皆漢文の直譯より來れる誤なり

入徳之門

などの場合の如し漢語にては語尾の變化なければ「入徳」は一の名詞と見て以つて「之」を附したるのみ然るを直譯して

徳に入るの門

といふは極めてわろし。但し

徒に思ふの學ぶに如かざるを知る

人を殺すの罪たるは明なり

などの例は已に名詞となりたるものにて主格なれば連體法とは謂ふべからず。尤かゝる時にも、純正なる國文にてはの代にがを用うる例なりと知るべし。

又

「君や來むわれや終止行かむ終止」のいざよひに
挿入文句

といへるは行かむと切れてあるを一の大なる名詞と見てのを添へたるなり。故にこののはといふに代へうべし。慙かる場合は誤ならねば克く注意せよ。

連體法の下に嘆辭をおくことあり

うつやつみ

まねくか野邊の花薄

(なほ次の例を祝よ)

山里にて湯あむるとて久しくこもりゐられたりしに(右京大夫集)

蘆分のさはる小舟の紅の深き心をよするとぞしれ(同上)

……おもしろき處あるとて立入りしかば(同上)

余ばかりをのがるもあり(熊坂)

あさりしてかひありけりと思ふ身をうらみてふると人やみるらむ(中務)

都には君にあふ坂近ければなこそ(頼朝)

さぬきの御局には乳房の恩を報い奉らぬあまつさへまた歎をかけ申す事(千手紙)

うたゝねのこの世の夢のはかなきにさめぬやがての命ともがな(後拾)

酒のめどのむますく(後拾)に涕し流る

出づるとも入るとも見えて足引の山の尾の上にすめる月かけ(續後拾、法印守禪)

潮待つ間に爲すべき事アラザルのなきといふはなし露伴

かすみつゝくるゝとおもひし春の日は朧月夜なほはいふべからずになりけるかな景樹

ほのかにたゞ小き鳥の浮べると思ひやらるるを須磨

程もなく暮るゝと思ひし冬の日の心もとなき折もありけり詞花道命阿闍梨

篇中の歌その主人公の詠すとすものにして實は業平の作にあらざるものあり藤岡

誰も見よみつればやがてかく月の

妻こふ鹿の音昔は皆妻とふ鹿

取與物アタフしなれば萬二

仰す旨盛二清水寺詣の段

いよ／＼なりとゞろきておはしますにつゞきたる廊下におちかゝりぬ明石

旅にして物戀之伎の鳴くことも聞えざりせば孤悲而死萬思萬二

千くさにもほはこぶる花紅葉賀の錦かなつら青柳ぬひし一すぢ源順集

連體法は領格の如く一種の關係ある體言に接續すること甚自由なり

教へるがものはない

洋服着たるが父なり

喜申すの目枕草紙

宮中に「申すの口」あり

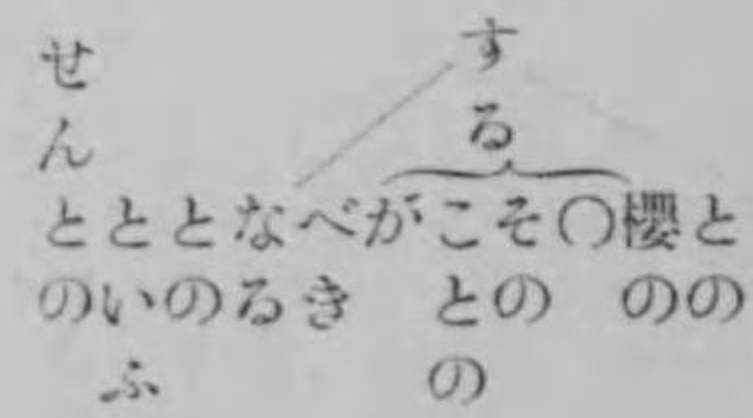
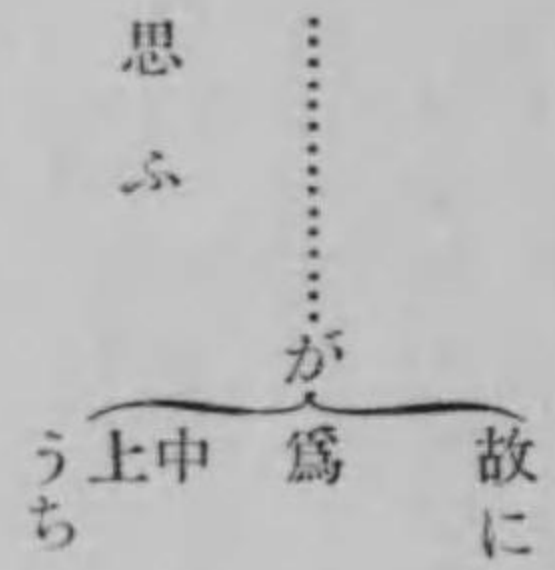
申すべきの候宇治拾

監督到らざるの致す所

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはんはかなき世をもうつゝとはみす古今十六

現にはさもこそあらめゆめにさへ人目をもると見るがわびし古今十三

秋の田のいねてふことをかけしかば思ひいづるが嬉しけもなし



連體の誤多し

日に斃る馬供養もす残暑かな

二本の梅に遅速を愛すかな蕪村

暮れむとす春ををしほの山櫻蕪村

まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻(蕪村)

(ハ)連用法 第二變化を用る次の二種あり

(甲)熟語的なるもの

書きやすし

ふりやむ

(乙)中止するもの

字を書き書を讀む

ツマク

されば

字を書き書を讀む時は

の如き場合はかきよむ共に時にかゝるを以つてかきも連體の中止法なりと説くは難なけれど、

君子儒たり小人儒たること勿れ

酒を飲み麥酒をのます

の如き例を君子儒たりも勿れにかゝり酒をのみもすにかゝるといはゞ全く意義を變ずるに至るべし。こは前に述べたる助動詞との接續を法と誤認したる失なり。「のみ」は「のます」といふ終止に對する中止、「君子儒たり」は「たること勿れ」といふ命令法の中止なり。「のま」を不定法などいひ、

「のみ」をその中止として「す」にかゝると説くは非なり。「長を取らず短を捨てず」を

長を取り短を捨てずの外らるしむんなどすべて

ともいふ事あるは「長を取り」を「短を捨て」に接續して併せて之を否定せるなれど、此の形は「長を取り」をば肯定したる場合に用うるが國語の本體にて「松もひき若なもつますなりぬるをいつしか櫻はやもさかなん(後)の如きは稀有の變例なり

春風はふけどふかねど梅の花さけるあたりはしるくぞありける(金樓)

花もさき紅葉もせねど松が枝の緑はとはにめづらしきかな(天平)

いづれ勝ち負けたる(イヅレカカチイヅレカマケタル)堤中納言

連用法にてを添ふるものあり古文口語に多く近文に少し

風ふき(テ)雨ふる

風がふいて雨がふる

(風がふいてといふが口語の本體なるべしそれを「風がふき雨がふる」といふは文語に引きつけられたるなるべし)

見てをり

見をり

見てをる

見をる

(口)

(文)

是等は修辭上又は習慣上の問題にして、文法よりしてその得失を説くべきにあらず。

鮎がはたでに妻多^{終止}互理美由(記下)

荊薦の亂出^{終止}所見(万二)

あま許伎久見由(万十四)
清來所見

朝月日向山月立^{終止}所見(万七)

(右は終止法にて連用法にあらず)

さて第二變化は連用法なれど、佐行變格のす及良行變格のありには連續せざる習慣あり。

書き^すあり^{非ナリ}

(テ)ある品にてテ附スレバ可ナリ。

備へ^{をる品}たる品
コレハ正し時の所にて更に述べん。

うちあること

まかり在り(新シキ語)

但佐行變格の方には

流れたえせぬ隅田川

第二變化

つきせぬ恨……………

くちせぬ名……………

雨ふりせば……………

いさなとり海や死^ス爲流山やしにする

死ぬれこそ海は潮ひて山は枯れすれ(萬葉十六) 青定は殊に少し

思遣すべの知らねば片もひの底にぞ吾者戀成爾家類(萬四)

念西死爲物爾有麻世波(萬四)

眞珠者緒絶爲爾伎登聞之故其緒復貫吾玉爾將爲(萬十六)

戀爲死爲物有者我身千遍死反(萬十一)

物思にしにするものとは(狭衣二)

はぢにしにせぬ身を(同上)

この昔物語はつきすべうなんあらぬ橋姫

何やかやとつきすまじかりけれど(同上)

つきすべくもあらねば(濱松)

いかに生ひやらんとすらん(葵)

おもひ^用なる^上 こひ^用なる

ふきみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心ちこそすれ野分

窓かうしあけなどして 山田氏は同類と見たり

聲はして姿は見えぬ

十月雨眉毛不置零爾西者誰里間宿可借金萬十二

和可禮須流 伎美萬十五

可聞同 柳こそ切ればはえすれ萬十四

吾念君爾不相死爲目萬四

の如く用ゐられたるあり或る人はたえつきくちは名詞にて之にせの添りたるなりといへど、予はその名詞なるか動詞なるかについては暫く斷言せざるべきも、せは意味を強うする爲に用ゐたる者なるを記憶すべし、降りせば「などの「せ」には異説あれど、時の章において詳論すべし。

二、命令法 動詞の第六變化を用う。

書をよめ

讀書せ

來

死ね

あれ

四段活につけるよ

この膝の上に大殿こもれよ若紫

あれとだにおほしおけよ藤袴

萬事をすて、參れよ枕

きこえ奉れよ宇都保菊宴

詞にて申せよ大和物語

過去の事實に反したることを希望するにも命令法を用うべきか。

大宮詞 こおと 攝政殿 の今しばしだに物し給へかし 乙女 讃岐本ニハコナシ、サレド源氏ノコトニ見シ、モイカミ

然るに

上一見よや

下一けよや

上二おきよよかし

下二うけよロイ……口語に

富士のねのならぬ思にもえばもえ神だにけたぬ空し煙を古今雜

ゑごひする君がはしたかしたかれの野にな放ちそ早く手にすゑ願集

それしてよせとらせとのたまはするに宇治十六

ゆきて見む駒に沓かけ石原や十市の里にはなさきぬめり(夫木十一)
いざ子ども小舟はやよせかの見ゆる嶋わの蓮たをらまくほし(同上)

の如くよといふ「てにをは」を附するものあれど、必しもよを添へざれば命令の意を成さずといふ理なし。やを添へ、よやを附し、よかしを置くも皆親愛の意を添ふるなり。されば現に地方によりてよを添へずして命令にいふ所あり。關西に多し。かしは感嘆詞とするもあれど、非なり。軽く抑ふる心地あるテニラハにて副詞にも終止法にもつく。

よを動詞の活用中に入る、人もあれど、よは全く動詞と別物なり。古文にはよを附けずして命令に用ゐしこと多し。但し近文にては上下一二段活には「よ」を添ふるを本則とす。

東京語に「よ」の代りに「ろ」を用うる事あり。思ふにろはよの變音なり。也行と良行とは極めて相近ければなり。

又別に命令として第二變化にねをそふるものあり。

よみね かきね

の如し。今口語に、およみなさいといふことをおよみいと云ふは命令の語尾を略したるにて、右の例とは異なり。又おきなといふはおきなさいなのなさいを略したるなれど、よみねはよみなさいねのなさいを省きたるものにはあらざる如し。案ずるに此のねは「てにをは」にあらすして助動詞完了ぬの第六變化なるべし。

な に ぬ ぬる ぬれ ぬ

即「よみね」は「よみたれ」といはんが如き語法なり。

古格 第一變化にねを添ふるものあり。

名のらさね (萬葉一)

こは命令なりされど「よみね」と同じく完了のねなりやといふに、よみは第二變化にしてこれは第一變化なれば同様に説くべからず併し

雨ふらな 家聞かな

のなは想像にて命令にあらず。古き一種の語法なり。

野邊の秋萩な散りそね(萬葉)

千早振いづしの宮の神の駒なのりそやた、りもぞする(重之集)

ねもころにな戀ひそよとぞ(萬十七)

これは打消の命令なり。この外口語に「前に出ろ」といふを「前に出る」或は「前に出た、おい出た」などいふ事あり。

いけ
いく
いつた
いかう

待つた(名詞ニモナル)

など皆然り是等は命令法といひ得ざるか「出ろ」といふが命令なればでもでたも共に命令なりといふは事實にはあたれど、その詞に果して命令の語氣ありや否やを考へざるべからず然るに

直説終止法

でる は「此の際汝はでるのだ」といふ意
でた は未來をいふに完了のたをそへて命令せられてしか動作したる様
をいへる者

でよう は未來にて勸誘の意ある

にて語氣は全く直説法の終止法なり事實と言語との異同關係深く注意すべし。

三、前提法(條件法、接續法) 動詞が他の語句の前提となりて之にかゝるものなり。

一、雪ふれば寒し

二、雪ふらば寒からむ

右の例にて普通(一)のふればを已然といひ(二)のふらばを將然といふ將然は將に然らむとする意にてふらむとすならば將然なれど、ふらむは將然にあらず。況してふらばは時に關係なき事明なり。(一)のふればは已に降りてありといふ意の時は已然といふも稍可なれど、一般には

雪のふる日はさむくこそあれ

などと同一にて時に關係なし又古は極端に

降ら未來り過去る現在る過去れ未來

と様に説きたる人あれど、動詞そのものは時に何等の關係なく、已然將然は時に關係したるものなれば、動詞の本體を説くに之をいふは非なり。

(1)前提法を分ちて次の如くす。

(甲)假定(假言)

一、順態 第一變化にばを添ふ。

雪ふらば寒からむ

二、逆態 第三變化にとともを添ふ。

雪ふるととも 寒からじ

(一)むけにしるしなくばかひなしとやおほしけん(落窪)

わがせこは玉にもがもな手にまきて見つ、ゆかんをおきていかばをし(萬十七)

ひとりして世をしつくさば高砂の松のときはも甲斐なかりけり(拾貫之)

をりとらばをしけにもあるか櫻花(古今)

(二)おのづからおもひいづともかひぞなきちきりしま、の心ならずは續千(爲定)

君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほなるらん(拾)

ちりぬともよし

(乙) 確定(實言)

あすか川せきてとゞむるものならばふちせになるとなにかいはせん(後撰)

一、順態 第五變化にばを添ふ。

雪ふればさむし

(これは實際にふるといふ事ありて「それによりて寒い」と言ふ意なり)

二、逆態 第五變化にどどもを添ふ。

雪ふれどども 寒からず

(丙) 不定(一般)

雪ふれば寒し

(このふればといふは降る降らぬの問題にあらずして、兎に角「ふると」「ふる時」といふ意なり)

不定は詞の上よりは確定と同形なれど、意味は異なり。

酒を飲めば酔ふ
生るれば死す

(形あるものは破る)

などにて動作の上より時に何等の關係もなし。

世をそむく昔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねむ(不定ニスベキ所)(遍昭、後撰)

(2) 口語に於いては、前提法は文語と異なること多ければ次に聊か述べむ。

(甲) 假定

一、順態

(イ) ふるならば ばを略しても

(ロ) ふつたらば (フツテハ)

(ハ) ふれば 文語の確定變じて、口語の假定となる。

(ニ) ふると 文語假定の逆態と同形なれど順態にて「ふるに」の義なり。

(ハ) (ニ) は主に不定に用ゐらる。

二、逆態

ふらう想像と
が

(乙) 確定

一、順態

ふるから
ふるので 副詞的ナリ次ノモ。

二、逆態

ふるが
けれども (ふつても)

大凡右の如し。なほ左に二三の例をいはむ。

假定にいひたるにて照し。めはさいふべし。

少しく進まば一の川あり

めは(ムト)

ちりぬれば戀ふれどしるしなきものを今日こそ櫻をらばをりてめ

酒を飲めどるはぬ人あり

「たら」を確定に用うることあり

日が暮れたら涼しくなつた
私が行つたら逃げた

此等は文語と特に異なり。

家づとにゆるせばとても梅の花見すべき人のあらばこそ折らめ(茂睡)妻なくなりて又の年
の上野花見

さゝなみのしがの大わたよどむとも昔の人に又もあはめやも

花サケリ、サラバ見ニユカン

(3) 準前提法 なほ準前提法といふべきものあり。形は前提法と異にして副詞的なれど意に於いては全く相類せるものなり。

一、順態 第四變化にときはを添ふ事にはを添ふるもあり。

連體 名詞の副詞となりたるもの

「ふれば」と全く同じ

知らんことには
なれば 話が分らぬ

曾我時政ノ心されば時政が家に源氏を罪にとりて後たのもしく繁昌する例ある事よ
とおもひめぐらす時はあながちきらひおもふべきにもあらず。

「……とねたましけにいふ時は腹立たしくなりて」(帚木)

然る間
さかひ

さる程に

上は
ふる以上は
からは

行くにつけては

二逆態

第四變化にをにもがを添ふ

ふるにを
がもにを
寒からず

「ふれども」に似たり共に副詞的なり

（を）は強くて古くには中程にて口語ののにと云ふに同じ

ふる體言を

連體

即ちをはにといふべきを強くいひたるなり又もはにもなるべし

ふるにも

縦通類書亦不知訓母讀子之轉化則其道難矣倭字古今通例全書ノ序(元祿九)

都へとおもふもものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり(土佐日記)

かやうにておはせましかばとおもふもむねふたがりておほゆ(源夕顔)
さて別當をたづねらるゝもなく(平治)
矢は當らざりしも痛手はおひぬ(平治)
忘れなんとおもふも物の悲しきをいかさまにしていかさまにせん
「むくいせん」とおもふも胸はしる(落窪)
今よりはいとうれしく明暮も侍ひぬべしとおもひ給へしも命のびてなん(落窪中納言)
已上の如く連體の下にもを添へて副詞的に用ゐたる例多くしてさまで新しきにはあらず
がが動詞に附きたるは新し

いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり(源桐壺)
の如きが明に名詞につきたるものなるが後鎌倉頃より已上の例より一轉して動詞の附屬と
なるに至れり

ふるが

候ふが

などなり(廣日本文典にがを是認してもを非認せるは穩ならず)

(4) 連用法との關係 連用法と前提法とは其の應用せらるゝ場合に於いて關係を生ず例へば

風も吹けば雨も降る

の吹けばは形は全く前提法なれども事實

風も吹き雨も降る

とあるべき連用法にして口語には又「風も吹くし」といふ連用法を用うるところなり。

男も居れば女も居る

(口別)も二件ヲテ動作事情ヲ並べテ云フモノ

形 居れば 前提法

事 居るし(文語) 連用法

など皆同例なりこれに反して

日暮れて道遠し

の「暮れて」の例は形は全く連用法にして事實は逆態前提法なり即ち「日暮れたるに道遠し」の意味なり

知りて知らざる真似す

の「知りて」も「知りつゝ」「知りながら」の意味にして「知りたるに」と解かば明瞭なり即ち形は依然連用法を用ゐて意味に於て逆態前提法なり

イフニニコソナルベシ

言へばえに

……と申せばおろかなりや(大鏡基經)

成らんといへばならん

まからんといつたら一文もまからん

連用法は平坦に接続し平坦に説明するものなれば「平接す」「平説す」といふを得べし前提法に於ける「順態」「逆態」といふも接続態の順或は逆なるよりの名にて順接逆接といひて平接と相比すべしさて兩法の錯綜する態を圖示すれば左の如し



「て」の添へる連用法にはもの「てにをは」を添ふる時は特に前提的となるべし例へば

水消えては波蕩苔のひけを洗ふ

の消えてはの如きは順態前提法「消ゆれば」の意味となり。

……につき其國の法令に遵由するに於ては「内國臣民又は人民と同一の條件に依り之が自由を享有すべし」(日米新條約第一條)

のてはは不定の意となり又

視ても見えず

の視てもは逆態前提法「見れども」の意味となれり漢籍に

視而不見

とあるを古く博士家の點より「視れども見えず」として道春點なども之に従ひたりしに、後藤點一齋點に至りては「視」をみれどもと讀みては「雖視」と混同する嫌ありとてか「視テ見ズ」と讀ませたり。古點の「みれども」又は「みても」「みるも」などは逆態前提法なること明なれど、「視て」とのみいひては不完全なり。理窟はつくべくともかゝる場合に然は言はぬ例なり。「見えず」を「見ず」といへる殊に甚し。仍「視る而して」とさへ讀めるものあり。すべて漢文を直譯したるのみにては國語にならぬもの多し。直譯のみならば如何様にせんも隨意なれど、國語に應用することは慎まざるべからず。口語にてもてはても三種を用う。

(5) 順態と逆態との關係

美味なるを知りて食ふ

急病なるを知りて見舞はず

の「知りて」の意味を考ふるに、前者は或る食物の美味なるを豫め知りたれば食ひたる義にして順態なり。後者は人の急病なるを知りて居ながら見舞はざる義にして逆態的なり。尙

知りては驚き (順態)

知りても驚かず (逆態)

とはもを添へなば意味明瞭とならむ即ち順態と逆態とは兩極端にして而も斯の如き意味の相通を見るは甚しく遠ざかりて再合體する自然の理に因れるものか。

小倉色紙に「さびしさに宿をたちいで、なかむれどいづこも同じ秋の夕暮」とある如きばどの異傳古書に少からず

又

積れば消ゆる庭の白雪

などは口語ツモルトの義にて順態にて事なけれど、事實の上にては積レド、積リテモ、積ルノニなどの場合に近し。

積ると思へば消ゆる雪かな

などいふは「積ルト思フノニ」の意にて逆態なり。是は「思へば然アルベキニ」などの義にて逆態前提法の語を省略せる者とも見らるべし。

黄葉におく白露の色にはも出でじとおもへばこととしけけく(緑分に萬十)

から衣新しくたつ年なれば人はかくこそふりまさりけれ(同上貫之集)

夏草はしゆく日毎になり行けばかれにし人は見えずなりのく(同上躬恆集)

又助動詞の例にては、

わたり果てねば明けぞしにける(古今)

いひもはてねば

官軍既によせ候ふと申しもはてねば先陣已にはせ來る

忠度……とのたまひも果てねば六彌太後よりさつまの守の首をとる(平家)

秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝けの風は手本寒母(萬八)

秋立ちて幾かもあらぬにこのねぬる朝けの風の袂涼しも後撰拾遺

から衣新しくたつ年なれば人はかくこそふりまさりけれ貫之集

ねばのねは動作を打消す助動詞「す」の第五變化にして「果てねば」「あらねば」といへば前提法順態の形となるを意味は純然たる逆態なり

俗語の

てへば(と言へば)關東東北

てふに

といふのに

ちふに九州

は何れも現在に於ては同義に用うる言葉なるが關東東北にて重に行はるゝ「てへば」「は」と言へば「の約言にしてもと順態前提法なるべきを逆態前提法の形なる「てふに」「といふのに」「ちふに」と義を同じくし逆態に通じたるものにて「といふに」よりも強く用ゐらる。

いやていば(こんくわい)

「お身に覺が無うてから詮議まんぎも喧しい(傾城反魂香)

六 特殊動詞

す

あり(ある)

いはゆる あらゆる

もちて おいて(おける)

つき

み(見)なり堀氏はもしの約といふ

ふりみふらすみ

なきみわらひみ

荒み 重み

天降る

いさつ

二人して見る 省いたからして分らぬ

心が變つた(か)して來ない

それからして

七 他詞に轉ず

動詞の他詞に轉ずるものを述べれば、

(1) 名詞に

(イ) 第二變化より た、かひ(戰) かすみ(霞) うたひ(謠)

第二變化必しも悉名詞に轉ずるにあらず、單獨にては語をなさぬものもあり、元來第二變化を名詞法として説く學者あれど、動詞の第二變化より名詞に轉じたる上からは、動詞の法として論すべきにあらず、然れどもこは學者の議論多き所、今こゝに詳論せざるべし。

(ロ) 第三變化より 第三變化よりのは、人名に多くして普通の名詞には極めて少し例へば勝信といふ名の如く、勝は四段活信は伸と通じ「のぶ」といふ上二段活にして、もし普通の名詞が第二變化よりする如くならば「かちのび」と讀まざるべからず、又昇登は通常第三變化なれど、今の渡邊昇氏の如きは「のほり」と第二變化にいへり、尙

治ハル 繁シガル 照オスル 守モスル 順タスル 競カスル 省ワスル 濟タスル 角力ツルク 出立デタツ 居候イマフ そほづ、うるふ、かけろふ、雲、火垂、樽、谷漏、御統、贊持之子、曙立子

など極めて多しされど人名にも第二變化の甫ハシメ 元ハシメ 一ハシメ 守モス 頼タカシ 行ユキの如きもあり又「のぶる」「あつる」「みつる」など呼ぶ名あるは普通「のぶ」「あつ」「みつ」とあるべきを俗語の副活ある動詞

多きにつれて「る」を添へて第四變化の如く讀めるまでにして實は訛なるべし。

臺記別記に「故尼上ノ侍女榮ヲ左加由留」とも書けり(玉勝間十二)

高い子崇い子、明けい子の類も連體形なり

(2) 形容詞に

疑ウタガハシはし 厭ウタガハシはし 願ウタガハシはし 痛ウタガハシまむ
胸ウタガハシつぶらはしくおほゆる種 荒ウタガハシまじ 面ウタガハシ向ウタガハシかむ

の如きは一種の接尾語によりて全く形容詞に成り了りたる者なり。

動詞の連體法は皆形容詞といはゞいはるべけれど、我が文法は語尾變化として轉成形容詞といはず、西洋の文法は動詞形容詞の性質を分有する意味より分詞と名づけたり。

流るゝ水

といふに「流るゝ」は連體法の動詞にして且つ水を形容したりされど連體形のみを用うるものは形容詞といふべし例へば

或る人 いはゆる道

の「或る」「いはゆる」の如し此等は今は全く連體形のみを用うれども、「或る」は「有り」「在り」といふラ行變格の第四變化連體法にして、「いはゆる」は「イフ」の被役ヤ行下二段活の第四變化連體法なりしなり。

「ある人」を「側」に在る「奉仕人」の義に竹取に多く用るたり。
(3) 副詞 接續詞に

極めて 例へば 申さば しかれども
マ行下二段 ハ行下二段 ナ行四段
の如し 尙後章にいふべし 二行四段

八 轉成動詞

他の品詞より動詞に轉じたるものを述べれば、

(1) 名詞より

(イ) さ行變格に

- (a) 筆す あらそひす 意味す 罪す 閱す 私す 心せよ 宿す
- (b) 儒者を坑にす 口にす 花を手にす 心を花にす 食をパンにし衣を毛織にす 聖書を足にす(足にかく、物す)

(ロ) 語末を活用せさするもの「装束」の音「さうぞく」の語尾はカ行四段に似てあれば「さうぞきて」などカ行四段活にいふ又「宣」の「のこつ」は蓋し言といふ名詞ならむを、タ行四段に活したり此の外

はいかる(洋語「ハイカウ」より) 料る(料理する) 酌ふ 問答ふ 猿樂ふ 序づ 彩色く

力む 目論む 濕ける 吟む 獨言つ 政つ かこつ 乞食く 敵對ふ 野飼ふ(後後拾) 息生く 隣る 境ふ 身そぐ おもひ／＼に勝負をさうどきあへるもいとをかしう(増鏡オドロ) まとるる(宇津穂春日詣)

の如きあり。

(ハ) 敬語のときに 御勉強あり 勉強なさる 勉強遊ばす 出御なる

(ニ) 動詞形なきもの 随分御勉強可然候 非常に御勤奉感謝候 御繰合御出被下度 ひとつ

お上り

(ホ) 接尾語を添ふるもの 腹む孕 深む 青む 貴む 危む 痛む 窪む 明らむ 唐めかす
うめく ひしめく きしめく ひらめく おほめく きらめく さめく そめく
生めく 學者ぶる 大人ぶ 塵ばむ
神さぶ 涙ぐむ やじる(彌次馬ノスル) 得手る(得手) くびる(繰る) 首る 退治る
罪なふ 音なふ トなふ 友なふ 荷なふ 商なふ 蕪なふ 呪 仇ふ 行ふ あざなふ

香ぐ嗅 股ぐ跨 肩ぐ擔 綱ぐ 項ぐ 味はふ 業はふ 賑はふ
耻らふ 休らふ (中らひ) 問ふらふ 數まふ わきまふ 見まふ

あけつらふ さ丹づらふ か、づらふ しつらふ

黄ばむ 氣色ばむ

筋ばる

氣ばる

散らばる

四角だっか

息ふ

うたふ

集侍ウツナトル

疊有ウツナトル

横たはる

遅

なはる (見ツナハス)

早る

澁る

赤る

強る

直る

皮肉る

直す

正す

白く

丸く

の如し

(2) 代名詞より は無し唯「誰何す」といふ語あるも「誰何」といふ漢語動詞をサ變に活したるまでなるべし

(3) 形容詞より

(1) 語根に「み」といふ接尾語を添へてサ行變格に活したるもの

重んず

輕んず

安んず

難んず

疎んず

嘉みす

なみす(サミス)

家なる妹いぶかしみせん(萬十二)

あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ(伊勢物語)

柔にして人になつかしんぜられよいそほ(中)

の中重んず以下五語は形容詞の語根に「ん」の添はりたるものなれど「嘉みす」の「み」の接尾語添はれる語あるより惟ふにんはみの撥ねたる音なるべく、それより「す」をも「す」と濁りたるなるべし。

能くす 完うす 忝うす 遅しうす

右は形容詞の連用法よりサ行變格に續きて活きたり

諧ワザナフにす 先にす

(ロ) 接尾語を添ふるもの

あはれがる

賢がる

強がる

廣がる

廣む

畏む

慥む

高む

貴む

赤む

早む

輕む

清む

赤らむ しが葉の比呂理いませは 大君ろかも(記下) 猛る(梟帥) 倭建(建部) (和名抄 太介無倍)

花やぐ 若やぐ たをやぐ 速く 鮮く 和ぐ 薄る

の如し

なげかしがる

心もとながる

(4) 聲貌より

きしる

すゝる

かむ

すゝむ

きしむ

あく

とゞろく

うつ

(5) 副詞より

(イ) 佐行變格に活くもの ぶらくす くらくす

(ロ) 接尾語を添ふるもの いなむ ざはつく ぶらつく

イナ(舌)の根本をいへば感動詞なり

(6) 動詞の疊語

行きゆきて たどりく／＼て (かもめたちたつ 流れく／＼て ありく／＼てわびしき目をも
 みる哉 たゞのみ
 副名
 これにて一先動詞の章を講了せん。

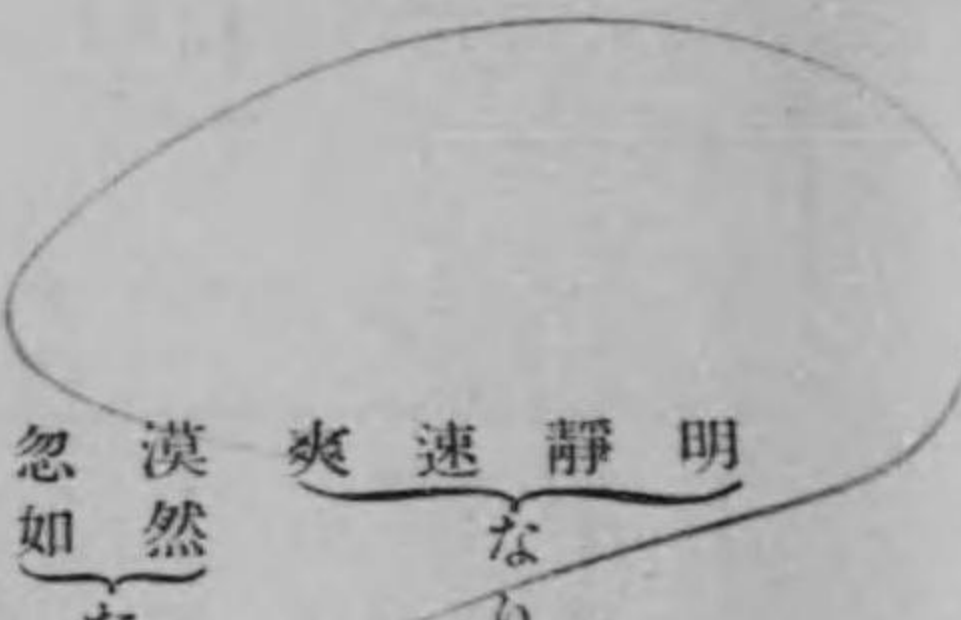
第六章 形容詞

一 種類形態

形容詞は活用の狀によりて四類に分つべし。

甲 く 活
 しく活 △富士谷氏ハヤク之ヲ在狀トイヘリ
 乙 たり活 | 「ことばのその」またさまことばとす

例へば
 善し 善き……………く 活
 悪し 悪しき……………しく活



の如し「月明けし」といはゞ形容詞ク活に屬するは勿論なれどナリ活なる「月明なり」といはゞ動詞態にてもあれば近來形容動詞と名づくる學者あり。

(1) ク活 好「く」「し」「き」「けれ」と活用す。
 (2) シク活 宜「しく」「し」「しき」「しけれ」と活用す。さて「宜し」までを語根と見なしてク活と一致せしめんとする説もあり然れども

大人し 久々し

の如き形容詞は「大人し」「久々し」を語根と見ざるべからざる不都合を來すべし。

(3) ナリ活 助動詞「なり」によりて活用するものにして「明なら」「なり」「なる」「なれ」と變化す。

○名詞と形容詞との轉用

達者 ナリ 丈夫 ナリ 上等 最下

藤原隆信朝臣集 廻文しなだまをかしまもまてしばしてまもひまなしか ことどもま
たなし

明月記寛喜二五二十日 いかなようるまさすと申

吾妻鏡元暦二四十五日 不覺氣なもの

徒然草六二 すぐなもじ

〔この形容詞の事(よほど書き加へざるべからず)……に進軍の日……に絶好の日。
まめやかかの心の友には(徒然) 特別の

○口語を入れるべし。

好かり相だ 高かりげだ

二 法

西洋の文法には、形容詞の法をとかされど、國語にては然ること能はず。今動詞のと同じく直説法、
命令法、前提法の順序に述べんとす。

(1) 直説法

(イ) 終止法は第三變化を用う。

〔附言〕シク活の「し、」

基俊集 家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はんこともやさしし

永長二年東塔東谷歌合 秋深み夜風烈しし宜しこそ四方の里人衣うつなれ

盛衰祇王 歌の音のよさよ、いしししとほめられけり

逆鱗 平家のもれきかんとをこがましし

長門本鏡 ほししほし、とおもはれける

無住法師雜談抄 何事も常にみるまはいとほし、いつもあかぬは粥と大乘

カリ活

萬十二 吾妹子にこひすべなかりむねをやき朝戸ひらけば見ゆるきりかも

萬十七 わがせこにこひすべなかりあし垣の外になけかふ我しかなしも

忠岑 おもひやる心の程に果もなし風の到らぬ限は多かり

(ロ) 連體法は第四變化を用る法の大體に於ては動詞と異なることなければいふべき事なし。

〔體言ニ〕の「ツツクルモノ、説明ヲ入ル

(ハ) 連用法は第二變化を用う、中止法副詞法あり。

a. 中止法

b. 副詞法

中止法には常にてして を添へても言へど、副詞なるは少し異なり。

彼は善く此は悪し

善くは中止法にして「善くて」「善くして」といふを得べく、

月明に星稀なり

の「明に」も中止法にして「明にて」「明にして」といふを得べし。

明に知る

「明に」は知るを形容して副詞法なり又

彼はよく談ず

の「よく」も副詞法なれども、共に「明にて」「よくして」と「して」を添へず。

斷然として行ふ

「斷然として」も副詞法なれども、「斷然とて」とはいはず即タリ活の「と」には「て」を添へざるなり。

(2) 命令法 は第六變化を用う。

人の爲「よかれ」と思ふ

「よかれ」は形容詞の命令法なるが、名詞の副格に準じて「と」と受けたり。

男兒は雄々しかれ

男兒は堂々たれ

人には「懇なれ

○臆病であるな(尋小修身書四)

○……………であれ(同上)

ともに命令法なり。今、動詞の命令法と比較してその意義を考ふるに、動詞によつて命令を與ふれば必ずその受くる所あれども、形容詞によつて與へたる命令はその受くるものなし例へば

能く學べ 善き事をせよ

といへば被命令者には學ぶか學ばぬか、するか、せぬか必ずそこに應ずる者あるべし、形容詞によつて

容態よかれ 品性高かれ

と命令するも被命令者はその命令に對して直接に應ずる事能はざるべし、畢竟一は直接の命令、一は間接の命令なり、形容詞は性質状態をあらはす詞にしてその性質状態は他の命令によつて如何ともする事能はざれば、形容詞はその實、命令にあらすして希望なり。

然れども人間以上の威力あるものはその希望を命令となし得べく、その際には動詞の命令法の意義と全く相一致す。これによりて考ふるに形容詞にはもと此の法なきが、全く動詞の力を假りたる者なるべし、即ち

白かれ 白くあれ(ラ變命令)

堂々たれ 堂々とあれ(ラ變命令)

懇なれ 懇にあれ(ラ變命令)

の本態に歸すべし。

(3) 前提法 ナリ活タリ活は動詞に準すれば今いはず

〔い〕 甲順態

一、假定 第二變化にばを添ふ

善くばとれ 悲しくば泣け

二、確定 第五變化にばを添ふ又不定となる。

よければとる 苦しければなく

乙逆態

一、假定 第二變化にとともを添ふ

よくとも とらじ 悲しくとも泣かじ

二、確定 第五變化にどともを添ふ又「不定」となる。

よけれど よけれど

位高けれども 驕らず

クテモ

クテモ

〔ろ〕をにもが時は故にてはてももの添ひて準前提法となる事、動詞に同じ。

〔は〕第二變化にもを添へて逆態前提法とする事あり。

錢なくも憂へず

クトモ(假定)
クトモ(確定不定)
クテモ(準前提法)

の如し「無くも」は「無くとも」に近く、「なきも」は「無けれど」に近し蓋し「無くも」の語法は鎌倉比よりあり。

徳川時代の文にも随分見らる又先年萬朝報の懸賞文に見えたる

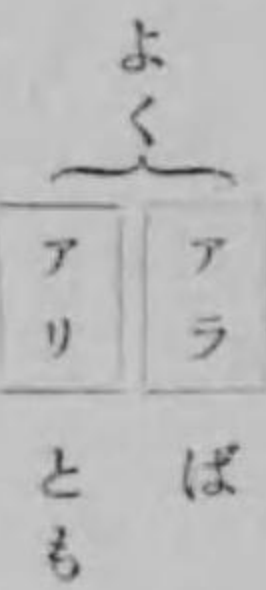
牛羊放つ野はなくも堤を築く粟なくも働く腕に汗垂りて懶者を鞭うつ氣概あり

の如き「も」は「ても」の略せられたるならむ

〔ク〕シク活に本来前提法なしその第一變化を缺くも此の爲なりよし形容詞に第一變化をおき

て「好くば」「悪しくば」とするも動詞の如く「す」「む」の添ふことなく又それに「よくとも」とトモの添

ふも動詞に準せず畢竟「よくば」「よくとも」などの假定前提法は、



の意にて順態逆態ともに動詞「あり」の略せられたるもの、即「よく」を連用法第二變化と見るべきなり而して「ば」とも「は」形容詞の所屬にあらずして動詞所屬の「て」には「なることを記憶すべし又

天氣よしとて遊ばず(正)

天氣よしとも……………(誤)

前者は正しく後者は誤れり「よし」は名詞の副格にして「と」にて受けて「好しといひても」「よしとあ

りても」の意味なり「好しとても」とあらば「も」は前に述べたる連用的逆態前提法なり後者の如く第三變化に「とも」を添ふる前提法はなきなり。

高しとも思はず

よしともよし

などは誤なけれど、

家貧しとも憂ふること勿れ

などは前の言方と紛ひて誤れるなるべし逆態前提の假定ならば第二變化に「貧しくとも」とあるべきなり。

玉葉 さそふべき木の葉も今は残らねばはけしくとても山おろしの風

ふるさとはこひしくとても吉野山花のさかりをいかで見すてん

さて又確定前提法にては右の如き省略なき様なれど實は然らずまづその第五變化の性質を述べべし。

記下 梯立のくらはし山は佐賀斯那村

多けれドモ……………ク活第五變化

多かれドモ……………カリ活第五變化

ク活第五變化も、カリ活第五變化も意味に於いて異なる事なし而して萬葉時代などは多くカリ

活の「○○」かれば「○○」かれども「けば」「けど」を用ゐてク活の「○○」かれば「○○」かれどもは甚少し(萬五、いたはしけれど、同五、和可家禮婆道行き知らじ)これより思ふに「かれ」といひ「けれ」といふもと「くあれ」の約にして「あれ」は矢張動詞ら行變格なるべく「かれ」は規則的に「けれ」は非規則的に音の約れるなるべし(或は「きあれ」の約音とも思はる「きあ」「くあ」の「か」となる事は勿論なれど、又「け」となる事も數多例ある事なり。

こゝにおいて前提法も命令法と同じく、形容詞の本體にあらざる事を知るべし、かく國語の形容詞は常に動詞に引かるゝ趣あり。

因にいふ形容詞の語根と動詞の語根とは大に異なる處あり形容詞のは語尾なくとも意をなせども、動詞は語尾なくては意をなさず

白シク (形容詞)

書ケク (動詞)

の例について思ふべし形容詞の語尾の「ク」は「コト」などの義ありて副詞を作るもの「シ」と「キ」とはもと「チ」なりしが二つに別れたるならむ羅馬字のchは「シ」「チ」「キ」と發音せられ、我が東北地方及支那或は一般の幼(幼)の發音にも「チ」「キ」を混する者あるなど參考すべし。

三 諸用法

(1) 名詞になること

(4) 語根

白シロ 青アヲ 赤アカ 高タカ 圓マダラ 酢ス

飛驒にて前をたかといひ伊勢にて空をたかといふ

記傳三 高へ上る

山梨日向岡山佐賀にて長一尺といふ

他名詞と熟するものに多し。

鼻高ハナタカ

の例にして鼻低ハナヒと熟するものにはあれど唯「低」といはず尙

端近ハシチカ 遠淺トホシ 鹽辛シホカ 日長ヒチガ 氣短キチカ 幅廣ハシロ 目太メノ 黒塗クロ

の如し。

(ロ) 第三變化より(人名ニ多シ、義齋、正棟)

からし芥子(辛) すし鮓(酸) おもし重(重) あかし燈(明)

お人よし 仲よし 生絹スズメ よしあし

御存じなし 心なし 意氣地なし 骨なし たのもし頼(頼)

但、おしろい(白粉)は第三變化「おしろし」とある「し」の音便にあらず、「おしろき」の音便にて古は「しろい物」といひしなり。

(ハ) 語根にみさけを添ふ。但シク活にありては第三變化に添ふ。

高タカ み トコロ

憎シクし活ノ意ニナレリみ

樂タカし氣(様子)

腹立シクさ名詞ニツケタル誤よ

「け」はナリ活となりて名詞にならぬもの多し。

悲しシけもなく……………名詞

いと悲しシけなり……………形容詞

の如し。

◎「け」は名詞にも動詞にもつく。こゝにも除くべきか。

ありシけ 熟語

さてのみ御心は通はせ給通ふ名詞けなる御けしきなれど(天鏡、貞觀殿ノ尙侍の段)

厭味ミナリ

翁ミナリみづからもわらははめきてサリけてなんひとりうたひて云々(伴蒿蹊、門田の早苗)

ねてばかり居るも氣づまりきに雪のけしきも見よと思ふ(廿四孝、ヒデ藏母詞)

◎さけ、けさ重用

にくさけ(天徳歌合判詞)

うら、かけさ(源氏初音) 美しけさ(同上)

御きみのはづかしけさなり(玉葛)

さる歌のきたなけさよ(伊勢百二段)

又「樂しみ」は動詞マ行四段活の第二變化より來る者と見るべし。

樂しみシテ活尾

動詞二變化

樂しみ (したしみ、かなしみ、あやしみ、いつくしみ、くるしみ、可笑しみ等)

の如くにして今は一般に動詞の方の語氣なり。送假名も形容詞、動詞によつて右の如くすべし。

〔副詞をつくる接尾語参照〕

「面白味」などの「味」は本項の「み」にして宛字なり。酸味の「味」も然り。正しくよまば字音「サンミ」といはざるべからず。味覺の味の文字と接尾語と偶然一致せるなり。但、卵の白身の「み」は「身」なり。

(二) 第二變化より

近く ナ望ム

遠く ガ、

多く ニ、

の如し。此の例は少し。

(ホ) 第二、第三變化を體言にし、にのをそふ(なほ眞の名詞にあらず、(ロ)にふくめて可なり)

時じくのかぐのこのみ(萬十八登吉時支能香久乃菓子乎)

早くの事

戀しくの多かる我

古くより

母なしに汝生りけめや(推古紀)

來る人なしの宿の庭(新古今十六)

(2) 熟語となるとき

ク活は語根のみを以て他語と熟す。シク活は第三變化より。

高山 細長し 薄暗し 遠鳴ナル動詞ハ非 高光る 近づく 遠のさかる 正無事

いせの海の渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつ、(六帖三)

動詞と形容詞とは熟せざるが原則なり。

むなし煙 さかしめ

かうばし飴 かなしめ

かなしいも 長々し夜

くはしめ
いかし鋒

空手（神代紀）

〔遠々し古志の國などは別語と見る〕
シク活ニヤ
うまし道

かたし（記傳ノ説）

特例 友なし千鳥 徒手（山家集下） 涼風 俊男

△み（主）がほし君 よし（主）なし事

(3) 感嘆的言方

語根が終止、或は連體の職務をなす。

(4) 終止

あなた（尊）ふと

現今 お（尊）こは
お（尊）あつ
お（尊）いた

(ロ) 連體

あな面白の景色やな

ありがたの心

あなにく（尊）の鳥や おだやかの御いらへや（夕霧）

後拾遺十二 いかにせんあなあやにくの春の日や夜半のけしきのか、らましかば

詞花十 朝なく鹿のしがらむ萩が枝の末葉の露のありがたの世や

シク活は第三變化を用う。

あやし（尊）のさまや

（終止 あな（尊）おそろし）

の如し。

新古今十六 有明の月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭にも

これは普通の終止にそへたるにて、(ロ)よりは感嘆の意少し。

後撰 郭公きゐる垣根はちかながら待ち遠にのみ聲の聞えぬ

同 關こゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつ哉

續後撰 みちのくのちかの鹽かまちながらからきは人にあはぬなりけり

(4) 疊語 すべて語根を疊めばシク活となる。

長し ↓長々し 深し ↓深々し

角い ↓角々しい 久し ↓久々し

事々し 忌々しなどなほ多し。

重々し 軽々し 遠々し

物々し 女々し 馴々し つきつきし
にぎくし うひくし おどろくし
うやくし くだくし 毒々し 美々し 凛々し

(5) 一語兩活

(1) ク活とナリ活

明 けし
あきらかなり

ちひさし
さひさなり
ちひさやかなり(帯木)

兩様のいひ方殆ど意を同じくし、かはけに當る。

寒

安 けくはからくなり

けし
けき
とはいはず

惜し

明ら

しづけ

けれ
トイフハナキヤウナリ(廣文典)
こまけれノナキニ類ス

ゆた

「あきらけし」を「明し」と書かば「あかし」と讀まる、恐あれば「明けし」とけを添ふるなりもとより語尾にもあらねば讀ます上の便宜なり此はもとケク活ともいひたれど、ク活に含めてよし。

速^カケシ 爽^カケ 遙^カケ 靜^カケ 長閑^カケ 和^カ軟^カケ 暖^カケ 青やか(夕顔) あてはか同
高^カヤカ 鮮^カ あざく(平家)

など皆同例なり。

而して「けし」を「かし」といふは近頃の訛なり。

暖^カケき家庭 軟^カケき物

の如し「暖^カケし」「軟^カケし」といへば古きやうに思はれて、ナリ活「暖^カなり」「軟^カなり」の「か」をとりて「暖^カし」「軟^カし」とはいふなり此の方言、今は特例として許容せらるべく、文法に於ける許容はかかる場合に行ふを以て當れりとなす。

梓弓よらの山べの之^繁牙可久爾いもろをたて、さねとはらふも(萬十四)

あひ見てはいくひささにもあらねども年月のごとおもほゆるかも(拾十二)コレハ萬葉十一

幾^イ久^ク毛^モヲ^ヲヨ^ヨミ^ミ誤^レル^ルナ^リ

されば口語の

暖^カな(暖^カなり) 細^カな(細^カなり)

は正しく、

暖^カい(暖^カし) 細^カい(細^カし)

は訛れる方なり。

従つて語根にさ及みを添ふる時も注意せざるべからず。

あた、^けか ………(正) のど ^けか ………(正)
………(不正) ………(不正)

「のどかさ」の「のどか」を語根とすれば「のどかさ」としてもよきやうなれど、^さみ^けはク、シク活に附くが本體にして、ナリ活に附くは特例なれば、矢張「のどけさ」といふべし。

ナリ活の「立派」は「立派さ」ともいへど、「立派み」とははず。

あた、かけ(末摘花)

あはれけに(平家、二)

康頼の弟の僧……あまりの無慚さに長門木

あはれさも(朝顔)

同じ じく じき(じ) じけれ

同じ なら になり なる なれ

多し しく しい けれ

多^大い なら になり なる なれ

もと「多い」は現今の所謂「多い」といふ意味と「大きな」といふ意味とをふくみて、「多」「大」いづれもおほしといへり。今位に正従といふを古は大廣といひて「大^大き」「廣^広き」といひしかば、今も正三位を「オ

ホキミツノ位「などいふなり。

(ロ)ク、シク兩活

うたて ^くしく

萬葉、うたは「うたてく」は一般に「うたてしく」は撰集抄に用ゐられたるを見れば、早く兩活併用と見ゆ。

○寶物集 金はうたてしきものとおもふが故にすつるなり。

いちじる ^くしく

「しるく」とのみも云へり。

○源氏末摘花、處女、明石、初音などには志久活。

不完全なれどもク活なり。

まだ ^きしき

「いまだしき」ともいふ。

○續紀宣命「許貴大斯伎意保伎天乃事乎」

あつ ^くしく

源氏桐壺に「あつしくなりゆく」と見ゆ。

痛 ^くしく

深 ^くしく

淡 ^くしく

古 ^くしく(方言)

前項疊語がシク活となり、或はこれらク活がシク活となる例によりて考ふるに、シク活は性狀を

かくナリ活にも活きて第五變化の「如くなれ」あれば、ク活なる「如けれ」を用うる事なし其の用らるゝや、

如く なら なる なれ ば なれ ぞ
シズムバ になり シテ けり たり トモ なる なれ バ なれ ヨ

い 名詞代名詞 領格のが
 ろ 動詞形容詞 連體法
 は 連體法 名詞領格が
 如し

花の 如し
 愚劣我が 如し
 流るゝ 如し
 貧しき 如し
 流るゝ 如し
 貧しき 如し
 是那如きが
尾的ナド 油やうの者
の如き 風狀
 此引 程位式

の如く、連體形を受くるは形容詞として類なきものなり「ごとし」の「ご」は「事」にして體言なれば連體法に連るなりかくて「ごとし」の「し」は用言なれば前體後用の詞ともいふ意味も「様なり」と謂ふべ

く「様」は體言にして連體に連るところ用法全く同じ
 尙「ごとし」に就いては國學院雜誌四十年一月の分に詳しく論じおきたれば就いて見るべし〔附録 参照〕

(8) 名詞より「ナリ活」に轉する者

夢中 勝手 上手 丈夫 十分 一杯 源助
 なり

私 公 巧(動詞ヨリ) だて(動詞) 角(殺聲カ) 本氣
 なり

大人 徒目 事儀 大儀 大變
 だ

の如し。

四 形容詞を造る接尾語

(1) く し き

知る
し く
け き
けれ

「知る」といふ動詞にくしきの接尾語添ひて著しといふ形容詞となる尙執念し二眠し二四角い二面
倒い「へほい」長しも同例なり。
(2)しく し しき
名詞につけば

大人 大人 しく
事々 事々 しく
骨々 骨々 しき
勞々 勞々 しけれ
際々 際々 しけれ

敬々 敬々 し
業々 業々 し
宗々 宗々 し
長々 長々 し
神々 神々 し

不具し
由々しく(初音)
才々し
生(生香集抄)
男々し

立たし(正し、直立の形)
心はし
潤はし(愛善美カ)

となり動詞につけば
狂はし
行か
望ま
し

願は 願はし
慕は 慕はし
向は 向はし

くはし 美 うつくし
食はし(細精)

○願はし望ましなどを他に對して言ふときは敬語の關係を生ず。
の如く、

狂はし 狂はし
狂はし 狂はし
厭はし 厭はし
戀はし 戀はし

はいづれも轉音なり「痛まし」といふに又「痛はし」あるは「ま」より「は」に轉じたりとも見らるべく「痛はる」の語もあれば或はその語の四段に活きてかく形容詞になり來れるか詳かならずなほ「歎かし」の「なけかはし」と「は」の添はれるは「ナゲカフ」といふハ行四段活より來れるなり副詞には

甚(ハナハダ) いとよし
未(イミダ) けにくし
うたて きらくし
おほく うべくし

の如し。
(3)けく

のど	よけく	いと、けき
露 <small>名</small>	あしけ	
形、語根	平けし	矢の繁 <small>かろこ</small> 計久
静	明けし	あはつつけし
さや		

古今雑 世の中のうけくになきぬ

萬九 筑波嶺のよけくと見れば

萬一 みよしの、山下風の寒久爾

貫之集 なかけくに色をそめつ、

ク、シク活よりけくとなるもの

いらなけく記 かなしけく紀

うけく萬 つらけく萬 寒けく

をしけく うれしけく

萬十八 黄金かも多能之氣久あらむと

けくの第五變化稀なり多くかり活にして言ふ。葵何にしのぶのといと、露けけれど一

(4)たし

重 <small>ま</small> (重し)	たし
平(扁平)	
ねむ(ねむし)	
藤	
煙(けむし)	
めで	
こち(言痛)	
うれ(愛)	
冷 <small>フ</small>	
口幅 <small>っ</small>	
じれ <small>っ</small>	

(5)らし シク活

男	らし
女	
學者	

但古今集神樂歌などの「深山には霞ふるらし」の「らし」は助動詞なり

(6)なし ク活

はした
 覺東
 おつか
 いわけ
 しどけ
 かたじけ
 勿體
 うしろめた
 を幼さ
 あぶ
 屹少度
 すく
 切
 いら
 如在
 難多きた
 なし

荒け
 さが
 せはし

此の「なし」を打消の「無し」と思ひ誤ること多し無覺東無端無勿體など、かくは宛字なり「はしたなし」と云ふも「はしたなり」といふも「切なし」といふも「切なり」といふも皆同義なり「うしろめたなし」を「うしろめたし」といふなど思ひ合すべし。

尙次の例を檢せよ。

古今 あはれともうしも物をおもふときなどか涙のいとなかるらん
 後撰 あしのいとなき戀もする哉

日本後紀 大同九年の詔詞正月云々雜亥毛繁久無暇支月利奈

篤胤 月花をわれもあはれと見てはあれどあはれとうたふいとなかりけり
 御堂關白集 いとけて春の都とみるからにうゑけん花のもとをしぞおもふ
 今昔 うしろめたなし

すけなしすけむはすけなくなること
 伊勢 さる歌のきたなけなさよ

古今著聞義家法師の妻に忍ぶ段 のがれかたなくて

長門本平家 荒けなき兵

もつけない(武藏川越在、ツマラス)

オホツカン(丹後)

徒然ナカ(佐賀)

さびしない(福井)

(7)がまし^{嗚呼}がはしも同語なるべし名詞動詞の連用法轉名に

をこ

へだて

かごと

差出

違背

色

賄賂

簇

みだり

がまし

それは恐れ^{入ッ}がましいことござる(樽間)

(8)はゆし 初音 罪えがましく心苦しとおほす

鹽 可恥也
面 はゆし
かはゆし

(9)勝なり 天氣 雨 晴 がちなり

(10)ほい 口語

濕

仇

忘れ

艶

子供

ぐち

おこり

安

むせ

ほい

(11) こい

あぶら
やに
ねぼり
すべ
しつ
ひや
こい

(12) どい

際
する
灰汁
どい
辛

(13) だらけ

埃
泥
だらけ

(14) がはし

(15) かし

みだり
がはし
亂

あるべ
古め
はづ
あぶな
よわ
かし

(16) かまし 厚かまし

(17)

走り
食ひ
通しなり

(18) らなり

べらなり
わびしらに

○もどかしなつかしなどの語尾の類推もあるべしそ、つかしそ、くヨリカ

妹こひしらに

(19) たらしい

虚^{うつ}憐^{なげ}たらしい

(20) やかなり

際
速進^{すみ}ヤカ?

あざ
あて
にぎ
さわ

やかに

(21) はか

浅
あて はか

(22) まし

あらましう(若紫)

(23) はし

如何はし
かたくなはし(右京大夫)
そゝらはし
にぎはし

第七章 動詞の性相

第一節 自他性

動詞は其の性質事物を處分するものと然らざるものとあり前者を他動詞といひ後者を自動詞といふ(自他といふ語彼我の意に聞えて極めて不穩當なれども慣行久しくて今急に改めがたし)

一 自他

雨降る 風吹く
の「降る」「吹く」といふ動作は何等事物を處分せず即ち物に及ばざれば自動なり然るに
犬をうつ 本をよむ

の「打つ」「讀む」の如きは、その動作が「犬」「本」に及び「犬」「本」を處分す「よむ」「見る」「考ふ」の如きは無

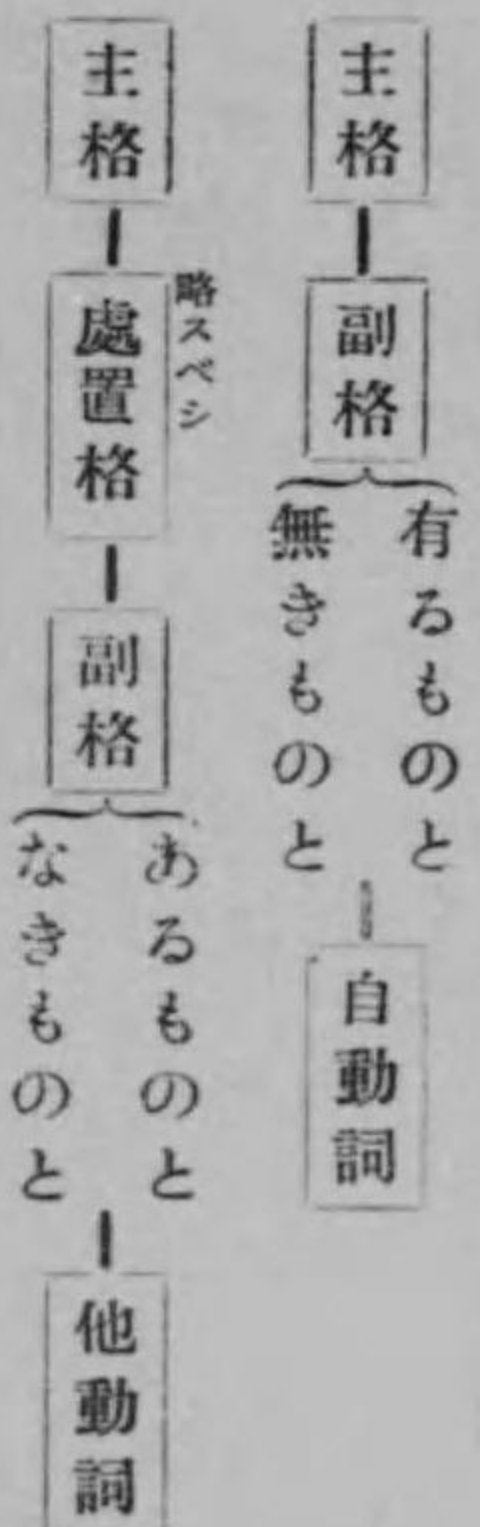
形の動作にしてなほ他動たり又

殺す
自ら其の身を刺す
打つ

の「殺す」「刺す」「打つ」の如き、他には關係なく、われと我が身を處分する動作も他動なる事勿論なり。

蠶絲を吐く

の「吐く」の如きも、蠶自身以外には關係せざればとて往々自動詞の如く誤らるゝことあり。是自他の本義を誤り、「絲」を處分することを忘れたるなり、注意すべし。動詞の自他性によつて、名詞に關する方式左の如し。



二 自他の特例

動詞の自動性他動性は明に別たるゝ如くにして、而も中には頗る別ち難き特例も多し(學者の異

説もありと知るべし)

(1) 一語兩性 一の動詞にして自動他動の兩性を併せもつもの。

(イ) 自動を他動に

鳥天に舞ふ	舞を舞ふ
馬に乗る	馬を乗る <small>御する義なり</small>
事去る	妻を去る

○七人つれて入り給ふ

上段の「舞ふ」「乗る」「去る」の如き自動詞は、下段の如き文にては全く他動詞となれり。

「何は何なり」といふ

ちりんくといふ

ぐづくといふ

何を何といふ

この「らふ」は口にて言ふことにして「いふ」といふ言葉の本義なれば自動性なるを

の如き「いふ」は他動性なり	
何は何なりといふ <small>自</small>	何は何なる事といふ <small>他</small>
何は何なりと思ふ <small>自</small>	何を何と思ふ <small>他</small>